

はじめに

開倫塾
塾長 林明夫

「論語講義」

Q1：この論語講義のねらいは何ですか。

A：(1) 論語の代表的な文章を中心に、参考文献を用いて「論語」の内容の基本的な理解を目指します。説明は参考文献、大半は(1)と(2)に依りますので、全文の内容の理解は参考文献の特に(1)と(2)を用いて行うことを希望します。

(2) 参考文献に従って論語に親しみ、毎日の生活や自分の人生を振り返る大切な古典として論語を活用するきっかけをつくって頂くことを目的といたします。

Q2：この論語講義の参考文献は何ですか。

A：以下の文献です。

- (1) 須永美知夫著『論語抄』史跡足利学校事務所、1993年3月25日刊
 - (2) { 吉田賢抗著『論語』新釈漢文大系1、明治書院 1960年5月25日刊
吉田賢抗著『論語』新書漢文大系1、明治書院 1996年6月18日刊
 - (3) 金谷治訳注『論語』岩波文庫、岩波書店 1999年11月16日発行
 - (4) 貝塚茂樹訳注『論語』中公文庫、中央公論新社 1973年7月10日刊
 - (5) 貝塚茂樹著『論語』中公クラシックス、中央公論社 2003年2月10日刊
 - (6) 吉川幸次郎著『論語上・下』朝日選書、朝日新聞出版 1996年10月25日刊
 - (7) 吉川幸次郎著『論語の話』ちくま学芸文庫、筑摩書房 2008年1月10日刊
 - (8) 岬龍一郎著『超訳論語 自分を磨く200の言葉』PHP文庫、PHP研究所 2009年6月17日刊
 - (9) 加地伸行著「論語、全訳注、増補版」講談社学術文庫 2009年9月10日刊
 - (10) 和辻哲郎著「孔子」岩波文庫、岩波書店 1988年12月16日刊
- 各章のA(1)の説明は参考文献(1)からの引用、(2)の説明は参考文献(2)からの引用です。

Q3：論語はどのように学べばよいとお考えですか。

- A：(1) 少し大きめの書店に行き、論語の全文が収録されている本をまずは一冊入手することをお勧めします。
- (2) 本文や書き下し文、現代語訳などで、毎日もしくは時々、折に触れてゆっくり読む。そして一章、一章の意味を「ああ、これはこういうことなのか」と自分の力で「理解」することをお勧めします。
- (3) 新しい章に取り組む前に、今まで自分の力で学んだところまでを声を出して繰り返し「音読」する、また、時間をつくって何回も「書き写す」と、論語が少しずつ身につく(「定着」する)と考えます。
- (4) 少し論語に親しみ慣れてきたら、なぜ孔子はこのようなことを伝えたのだろうかとお考えになることをお勧めします。孔子の一生を調べたり、孔子の弟子たちの様子を調べていくと、孔子が弟子や相手によって各々にふさわしい個別的な指導をしていることがわかってきます。
- (5) 自分の生活や人生を振り返ったり、今後の生活や人生をどうするかを考えたりするときに論語はとても参考になります(応用)。いつまでも忘れないように、お気に入りの章は繰り返し「音読」し、「書き写す」ことをお勧めします。
- (6) 時間があったら、日本で論語を研究・普及させたゆかりの地である足利学校や、湯島昌平堂を訪問したり、孔子のゆかりの地である曲阜を訪問することも、孔子や論語の理解を深め趣深いと思います。
- (7) まずは、テキストを一冊決めて論語を読み込みましょう。

学而第一

子曰、学而時習之、不亦説乎。

有朋自遠方来、不亦楽乎。

人不知而不愠、不亦君子乎。

子曰わく、^{まな}学^{とき}びて時^こに之^{なら}れを習^まう、亦^{よるこ}た説^{よるこ}ばしからずや。

^{とも}朋^あ有^{えんぼう}り遠^{きた}方^まより来^{たの}る、亦^また楽^{たの}しからずや。

^{ひと}人^し知^いらずして^い搢^{きどお}らず、亦^また^ま君^{くん}子^しならずや。

(1-1)

<子曰わく>

Q:「子曰わく」とは何ですか。

A: (1)「子」とは男子の美称、あるいは通称。転じて、ここでは、師に対する代名詞、「先生」というほどの意味です。弟子たちの間では、「子」すなわち先生とは孔子を意味。

(2)「曰わく」とは「言った」の意。

(3)「子曰わく」とは、先生の言葉、孔子が言ったの意。

<学^{まな}びて>

Q:「学^{まな}びて時^{とき}に之^これを習^{なら}う」の「学」とは何ですか。

A:「学」とは学問のこと。

「学」とは、人のまねをすることから始まって、遂に「なるほどこうであったか」と悟入(すっかり悟りの境地に達すること)するの意。

<学^{まな}ぶ内容>

Q:何を学^{まな}ぶのですか。

A:学^{まな}ぶ内容は、具体的には、孔子の教団の重要な教科であった、昔の聖人の教え「詩経」と「書経」を読み、「礼」と「楽」を学^{まな}んで実践に移すこと。

<時^{とき}に>

Q:「時^{とき}に之^これを習^{なら}う」の「時^{とき}に」とは何ですか。

A:「時^{とき}に」とは、「学^{まな}ぼうとして学^{まな}べるときには機会を逃さずにいつでも、然るべきときに、timelyに、四六時中に」の意。時々、occasionally や sometimes ではないようです。

<之れを習う>

Q:「之れを習う」とは何ですか。

A: (1)「習う」とは、「何回も何回も繰り返して復習すること、幾度も練習、実習すること」の意。

(2)何回も何回も繰り返して復習すると、学んだところのものは自分の真の知識として体得される。反復習熟しているうちに理解が深まり、自分のものとして体得される。

(3)「習」とは、鳥のしばしば飛ぶことを意味。「習」の字は、雛鳥(ひなどり)が巣立ちをする前にしばしば羽ばたきの稽古けいこをすることを意味。雛鳥のように、自習を続けることで学んだことが実行に移される。

(4)「理解」したことを、「定着」のための様々な練習(音読練習や書き取り練習、計算・問題練習など)を繰り返してしっかり身につけ、自分のものにするのと、現代的には解釈されます。

<亦た説ばしからずや>

Q:「亦た説ばしからずや」とは何ですか。

A: (1)「亦また～からずや」とは、「それは何と～ではないか」、「どうだ～ではないか」と強くやわらかく話しかけて相手の同意を促すの意。疑問の形式を用いて、結論を強く打ち出す形式。この場合の「亦」は、感嘆詠嘆の意味をもって語調を整え、やわらげる助詞。「～もまた」の意ではない。

(2)「説」は「悦」と同じ。心によるこびを感じる事。心中に嬉しく思うこと。

(3)「亦た説ばしからずや」とは、「これまた何と喜ばしい、愉快なことではないか」の意。

<朋有り遠方より来る>

Q:「朋有り遠方より来る」とは何ですか。

A: (1)「朋」とは「友達」の意。師を同じくする人を「朋」、志を同じくする人を「友」と区別することもあります。ここでは区別はないようです。

(2)「朋有」とは、実際には孔子の門人、あるいは、孔子の学問を慕したう人たちが、遠い所から慕い集まるの意。

(3)「このようにして、知識が豊かになれば、学問について志、道を同じくする友達が遠い所からやって来て、学問について話し合うようになる」の意。

<亦た楽しからずや>

Q:「亦た楽しからずや」とは何ですか。

A: (1)「楽」とは、「悦びが心の外にあふれ、容貌にも現れる」の意。

(2)「楽」は、自分一人の悦びをいう「悦」に対して。門人や学友と共に研究して発明する楽しみ。

(3)学問のよろこびを今日では誰でも知っているが、古代においては必ずしもそうでなかった。孔子はそれを最初にはっきりと指摘した人物の一人。

(4)ただ、学問を学ぶことは難しくたいへんな努力が要る。それほど難しい学問の道ではあるが、その間には楽しいことも混じっている。学問とは楽しいものだと思いつけないで、体験に即して控え目に楽しさを述べるのが孔子の語り口。この温雅な調子が、「論語」の全体の

基調となっているようです。

<人知らずして慍らず>

Q:「人知らずして慍らず」とは何ですか。

A:(1)「人」とは、世人であるが、ここでは、具体的に言えば、自分を挙げて用いてくれない君主王侯のこと。

(2)「人知らずして」とは、「いくら勉強して自分の学徳ができあがっても、この自分を認めてくれない人が世間にはいる。自分の勉強がつねに人から認められるとは限らない。自分が社会に登用されないこともある」の意。

(3)人から知^みめられないことがあっても「慍らず」、つまり怒らない。怨^{うら}まない。腹をたてない。

<亦た君子ならずや>

Q:「亦た君子ならずや」とは何ですか。

A:(1)「君子」とは、学徳ともにすぐれた人、学徳のできあがった人の意。人格の高い人。立派な人。

(2)「君子」とは、元来、位と徳とを兼ね備えた人の意。学徳があつて、民を治める者の意。後には、位がなくても、学徳があつて人の上に立つ資格のある人を「君子」と称するようになった。

(3)故に、「君子」は「有徳の人」、「有位の人」、「学者」の3つの意味に使い分けるが、現代にはこれに代わるものがない。

(4)明解国語辞典には、「君子」とは、「些^{ささい}細なことに感情を動かしたり、誘惑にあつて自分の初志を見失ったり、困難に出くわしてくじけたりすることの無い、理想的な人格者」とあります。

2011年5月22日林明夫記

(1)孔子が言った。学問をして、その学んだところを、復習できる機会を逃さずに、何回も何回も、くり返して復習すると、学んだところのものは、自分の真の知識として完全に消化され、体得される。これはまた、なんと喜ばしいことではないか。このようにして、知識が豊かになれば、道を同じくする友達が、遠い所からまでもやって来て、学問について話しあうようになる。これはまた、なんと楽しいことではないか。しかし、いくら勉強しても、この自分を認めてくれない人が世間にはいるもの。そうした人がいたとしても、怨まない。それでこそ、学徳ともにすぐれた君子ではないか。

(2)・学んだことをいつも繰り返し習っていると、いつの間にか理解が深まって自分のものとなり、自由に働きを表すようになる。これはなんと嬉しいことではないか。

・このように勉強していると、自然と同学同志で遠くから慕って来る者があって、学問について話し合いをする。これはなんと楽しいことではないか。

・修養と学問は自分の力でできても、人との関係は時のめぐり合わせで、必ずしも自分の思うようにはならぬが、さて、世人が自分の学徳を認めてくれなくても、不平不満を抱かない人は、なんと学徳の高い、りっぱな人ではないか。

学而第一

子曰、巧言令色、鮮矣仁。

し い こうげんれいしよく すくな じん
 子曰わく、巧言令色、鮮きかな仁。

(1-3)

< 巧言令色 >

Q : 「巧言令色」とは何ですか。

- A : (1) 「たくみに言葉を飾ったり、たくみに顔色をとりつくるったりする人物には」の意。
 (2) 「口先がうまくて、あいそウのいい顔つきをする人には」の意。
 (3) 「巧」とは、「好」「たくみ」の意。「巧言」とは、言葉がうまくて、心にもない愛想、お世辞を言う、たくみに言葉を飾ったりすること。これでは、その人の本心が疑われる。
 (4) 「令色」の「令」とは、「善く」の意。「令色」とは、顔色を善くして人の気に入るよう顔色を飾ること。たくみに顔色をとりつくるったりすること。
 (5) 相手を喜ばそうと、言葉をたくみに使っておべんちゃらを言ったり、外見の体裁やファッションだけにこだわるような「うわべだけの人」の意。

< 鮮きかな仁 >

Q : 「鮮きかな仁」とは何ですか。

- A : (1) 「ほとんど仁(人間愛)の道は無いと言ってよい」の意。
 (2) 「愛情の真実心は少ないものだなあ」の意。
 (3) 「人の本心の徳たる真実心はほとんどない」の意。
 (4) 孔子は、また、「剛毅木訥は仁に近し」とも言っている。(13-339)

2011年5月23日林明夫記

学而第一

曾子曰、吾日三省吾身。

為人謀而不忠乎。

興朋友交而不信乎。

伝不習乎。

そうし い われ ひ み わ み かえり
 曾子曰わく、吾、日に三たび吾が身を省みる。

ひと ため はか ちゆう
 人の為に謀りて忠ならざるか。

ほうゆう まじ しん
 朋友と交わりて信ならざるか。

なら つと
 習わざるを伝うるか。

(1-4)

< 曾子曰わく >

Q : 「曾子曰わく」とは何ですか。

A : 「曾子」は、孔子の門人で、孔子より 46 歳若かった。年は若かったが、孔子の道を伝えた第一人者でした。

< 吾、日に三たび吾が身を省みる >

Q : 「吾、日に三たび吾が身を省みる」とは何ですか。

A : (1) 「私は一日の中で何回も何回も、主として次の点について反省する」の意。

(2) 「私は、毎日何度となく自分の行ったことを反省してみる」の意。

(3) 「三省」とは、しばしば反省考察するの意。丁寧(ていねい)に反復して、自分の身を省みること。

(4) 荀子の「君子は、博く学び、日に己れを参省すれば、知、明らかにして、行、過つことなし」(勸学)の「参省」と同じ。

< 人の為に謀りて忠ならざるか >

Q : 「人の為に謀りて忠ならざるか」とは何ですか。

A : (1) 「他人のために相談に乗った時、ほんとうに誠意、まごころをもって考えてやったか」の意。

(2) 「人の世話をしながら、忠実さを欠いていることはなかっただろうか」の意。

(3) 「謀」とは、相談に乗って計り考えてやる、世話するの意。「忠」とは、口と心の一致することとも言い、あるいは、中心であるとも言うが、要するに人のまことの意。忠君の忠も、またこの義。

< 朋友と交わりて信ならざるか >

Q : 「朋友と交わりて信ならざるか」とは何ですか。

A : (1) 「友達との交際において、信義をつくさない、約束をたがえたことはなかつたらうか」の意。

(2) 「友だちづき合いに、信義に欠けたことはなかつたらうか」の意。

(3) 「朋友」とは、友人。

(4) 「信」とは詐りいつわのない誠まこと。

信は人と言との会意文字で、人の言は詐りがあつてはならないもの。

(ア) 「忠」は、己一個で真心を貫く誠。

(イ) 「信」は、他人との関係において欺かない誠。

(ウ) 論語では共に「まこと」と読む、極めて大切な語。

< 習わざるを伝うるか >

Q : 「習わざるを伝うるか」とは何ですか。

A : (1) 「まだ自分の知識として完全に消化されていない事からを、他人に教え伝えはしなかつたらうか」の意。

(2) 「先生から教わったことで、まだ自分のものとなり切らないものを、口先だけで人に教えたりしたことはなかつたらうか」の意。

(3) 自分がまだ十分に身につけなかつたことを、他人に伝えはしないか。学んでも、よくおさらいもしないでまだ習熟して自分のものとなり切らないものを受け売りで人に教えて、人を誤らせはしないかとの学問的・学者的良心から出た反省。

(4) このほかに、「かつて孔子から教わったことを十分納得するまで復習せずに、弟子たちに教えてしまったのではないか」という解釈もある。

(5) また、「伝を習わざるか」と読み、「古典の勉強を怠おこたっているのではないか」と解釈する説もある。

(6) 更に、「伝えられて習はざるか」と読み、「師から伝えられたことに対し、時に之を習うという努力を払わなかつたのではないか」の意に解釈する説もある。

(7) この反省は、現代でいうリフレクション(reflection)にあたる。教育者たる者の深く慎戒すべきこと。教育者たる者は、日々に学修に努め、いやしくも自分のものとならないものを伝えるような受け売りをしてはならない。日夕畏れ省みおそて、過あやまちがあれば速やかに改め、なければ益々励み努めること。易に「君子終日乾乾し、夕べに惕てきじやく惹たり」(乾惕)とある。

(8) この「三省」で反省させられる事からはすべて、他人に関係する事からである。ただ一人ひきこもって、自分の心を研ぎすますというようなものは、論語の道徳ではないようだ。

2011年5月23日林明夫記

学而第一

子曰、君子食無求飽、居無求安、
敏於事而慎於言、就有道而正焉。可謂好學也已。

子曰わく、君子は、食飽かんことを求むる無く、
居安からんことを求むる無く、
事に敏にして、
言に慎み、
有道に就きて正す。
学を好むと謂うべきのみ。

(1-14)

<子曰わく、君子は、食飽かんことを求むる無く>

Q：「子曰わく、君子は、食飽かんことを求むる無く」とは何ですか。

A：(1)「孔子が言った。学問に志す君子は、食事には満腹を求めず」の意。

(2)「学問修養に志す人は、腹いっぱい食べてはならぬ」の意。

(3)「君子」とは、「学問修養に志している人」の意。

(4)「飽」とは、「腹一杯食うこと」の意。

<居安からんことを求むる無く>

Q：「居安からんことを求むる無く」とは何ですか。

A：(1)「住居には、安泰を求めない」の意。

(2)「住居を得ようなどと思うてはならぬ」の意。

(3)「安」とは、「安逸、安楽」の意。

<事に敏にして、言に慎み>

Q：「事に敏にして、言に慎み」とは何ですか。

A：(1)「やらねばならぬことは、すばやく実行するが、言葉は慎重にし」の意。

(2)「自分の為さねばならないことは速やかに実行し、言葉を慎んで軽はずみを言わない」の意。

(3)「事に於て敏」とは、「せねばならぬことをすばやく行う」の意。「敏」は「疾」の意。行為は怠慢になり易いから、敏を貴ぶ。

(4)「言に慎み」とは、「言葉を慎重にする」の意。言はみだりに発し易いから、慎を重んずる。

<有道に就きて正す。学を好むと謂うべきのみ>

Q：「有道に就きて正す。学を好むと謂うべきのみ」とは何ですか。

A：(1)「道徳的に完成された先輩について、自分の過ちを正して行く。こういう人こそ、好学の

人と言えるだろう」の意。

(2)「更に徳の修まったものに近づき親しんで、己の過ちを正していけるような人であったら、こんな人こそ真に学問好きだということができよう」の意。

(3)「有道」とは、「学徳のまさった人」の意。

(4)「正す」とは、「己の是非善悪を質問して、その誤りを正す」の意。

(5)「好学」。孔子の教えはすべて実践の学。

(6)「不言実行」は孔子の信条。「君子は言に訥にして行に敏ならんことを欲す」(90)は、孔子の平素の心掛け。孔子はどこまでも実践的であり、行動主義者。学問を好むことは、文字を学び、故事に通じ、理論に長ずることではない。やはり、実践的であり、行動的。倫理を説く者は空言であってはならない。明の王陽明が知行合一の学を説いたのは、蓋し孔子の本懐であろう。

2011年6月7日林明夫記

学而第一

子曰、不患人之不己知、患不知人也。

子曰わく、人の己を知らざることを患えず。
人を知らざることを患うなり

(1-16)

<子曰わく、人の己を知らざることを患えず>

Q:「子曰わく、人の己を知らざることを患えず」とは何ですか。

A: (1)「孔子が言った。他人が、こちらの真価を知ってくれなくとも、気にかける必要はない」の意。

(2)「他人が自分の学徳と実力を知ってくれないことを心配すべきではない」の意。

(3)「患う」とは、「心配し、気にかける。苦しめる」の意。

<人を知らざることを患うなり>

Q:「人を知らざることを患うなり」とは何ですか。

A: (1)「それよりも、自分が、他人の真価を認めないことを、心すべきである」の意。

(2)「ただ、他人の賢、愚、能、不能を自分が知らないのではないかを心配する」の意。

(3)人を知るの明は、古今東西の別なく困難。更に明君賢臣が並び立って十分に働きを表すことは極めて稀有のこと。孔子も学徳が成って、天下に自分が登用され、その道の実現されることを念願。孔子の門人もまた、この希望にもえた。しかし、子弟ともに天下に明なきを嘆いた。天下の知遇は時にかかわり、他人のやることであって、孔子の聖を似てしてもこの窮達の展開は如何ともできなかつた。孔子はこの理に目覚めた反面、己もまた人の賢愚正邪を見誤りはしないかとひそかに恐れるに至った。己の不明のために、世の賢哲を見逃したり、また、世人に害毒を及ぼしてはならない。かくの如く自分に対する人の毀譽、つまり悪口を言うこととほめることはこれを超越し、人の是非を知って過誤なからんことを期したのは、失敗と苦勞を重ねた長い人生航路において至った尊い人生観。

(4)論語の編者は、孔子のこの語を記録して、第一章の「人知らずして慍らず、亦た君子ならずや」に呼応せしめた。

2011年6月7日林明夫記

為政第二

子曰、吾十有五而志干学、三十而立、四十而不惑、
五十而知天命、六十而耳順、七十而従心所欲、不踰矩。

子曰わく、吾十有五にして学に志す。

三十にして立つ。

四十にして惑わず。

五十にして天命を知る。

六十にして耳順う。

七十にして心の欲する所に従えども、矩を踰えず。

(2-20)

<子曰わく、吾十有五にして学に志す>

Q:「子曰わく、吾十有五にして学に志す」とは何ですか。

A: (1)「孔子が言った。私は十五歳で学問に志し」の意。

(2)「私は十五歳ごろから先生、先賢の教えを説いた礼楽の学問をしようと決心した」の意。

(3)「十有五」の「有」は「又」と同じ音義語。「十且五」「十と五」の意。

(4)「而」は接続詞で重みをつけた。

(5)「志す」は、「心の向かいゆく」「決心した」の意。

(6)「学に志す」は「三代の文化、先王の学を学ぼうと志を立てた」の意。

<三十にして立つ>

Q:「三十にして立つ」とは何ですか。

A: (1)「三十歳で、思想も、見識も確立した」の意。

(2)「三十歳にして、その礼楽の学問について独自の見解が確立した」の意。

(3)「十五歳で志した先賢の礼楽の学で、独自の思想・見識をしっかりと確立した」。

(4)「その学で一家を成した」。

<四十にして惑わず>

Q:「四十にして惑わず」とは何ですか。

A: (1)「四十歳で心の惑いもなくなり」の意。

(2)「四十歳ごろで事理が明らかになって、物事に惑うことがなくなった」の意。

(3)「事にあたって惑うことがなくなった。理的に、意志的に物事の道理に惑わなくなった」。

(4)人格と見識が確立され、「三十にして立つ」の知識獲得の一段階より更に大きく飛躍したものの。

(5)三十にして学理探究に一時期を画した孔子は、更に十年間の深い知識修得の努力と、激変する社会情勢を静視することで、己の去就に惑うことが無くなったのが四十歳ごろ。

<五十にして天命を知る>

Q:「五十にして天命を知る」とは何ですか。

A: (1)「五十歳で、天から与えられた使命を自覚した」の意。

(2)「天が自分に命じ与えたものが何であるかを覚^{きと}り、また、世の中には天運の存するという
ことを知ることができた」の意。

(3)孔子は五十歳のころ天命を受けたとの信念に達した。

(4)「人間の力の限界を知った」の意か。

<天命>とは.....

1. 孔子の思想から考えて、次の3つの意味がある。

(1)天がこの人間に与えた人の本性の働きというものは何か。

(2)自分のこの世に生まれた使命。

(3)天の支配に在る窮達、その運命というようなもの。

2. この3つの意義を持つ「天命」を知った孔子は、人の本性の働きとして「仁」という徳の名を説き出した。自分のこの世に生まれた「使命」として、先王の礼樂の教えで天下を平和にしようと考えた。

3. その3つの運命という意味は「人知らずして慍らず」と同じで、他人が自分の能力を認めず、登用されないということは、天運で如何ともできないものだから、その命に安んずるという、大悟徹底した境地にいたる心境。

(5)「天命を知る」とは、聖賢の世界が開けたの意か。釈迦は三十五歳にして大悟したということが、同じような意味か。「天命を知る」とは、天が人間に与えた性の働きは何かということを知り、自分がこの世に生を与えられた意義、すなわちこの世に生まれた使命を知り、また、人力では如何ともできない窮通の分を知ること、大自然の命理を悟った。

(6)易に「理を窮め、性を尽くし、以て命に至る」(説卦伝)とあるが、「天命を知る」とはこの意味。これらの心境は、論語に^{しばしば}屢々出てくる。この時期を画して、孔子の人生は大きく展開、天理への開眼、真理と人間の問題に一解決を得た一個の哲人となった。

<六十にして耳順う>

Q:「六十にして耳順う」とは何ですか。

A: (1)「六十歳で、何を聞いても耳にさからうことがなくなり」の意。

(2)「六十歳ごろは、何を聞いても皆スラスラわかるようになったし、世間の毀譽褒貶^{きよほうへん}にも心が動かなくなった」の意。

(3)六十歳になって知識広博となり、毀譽に超然たる円熟の境地に達した。知と徳の円熟さの極点を得た。

(4)孔子は博学であったようだが、ただの物知りではない。事理の解明に滞ることがなかった。世の毀譽の言を超越した。自分の使命に生きる孔子は、世人の悪評や褒め言葉に心の動くことはない。自分の耳に入る言葉は悉く消化されて、何の障害をもおこさない。

(5)「五十にして耳順う」とは、悟達と理解の最高峰。超越境に自適したもの。

<七十にして心の欲する所に従えども、矩を踰えず>

Q : 「七十にして心の欲する所に従えども、矩を踰えず」とは何ですか。

A : (1) 「七十歳になると、自分の欲望のままに振舞っても、その行動が道德からはずれることはなかった」の意。

(2) 「七十歳になっては、心の欲するままに行うことが、いつでも道德の基準に合って、道理に違ふことがなくなり、真の自由を楽しめるようになった」の意。

(3) 七十歳になって心の欲するままに行動しても、規範に合し、道理にはずれるようなことがなくなった。自由に自然に振舞うところ、そのまま道に適中するという徳の極致に達した。

(4) 「六十耳順」が超越境なら、「七十従心」は解脱境と言える。

(5) 七十にして心の欲する所に従えどもすべての規範・法則を踰えないとは、超越境から再び行為の世界へ戻って、しかも何等の障害のない解脱の世界に入ったとも言える。現実の意欲と理性の合致、調和。人の内なる道德律が、天なる真理と常に合することのできる人間的行動。真の自由の世界。人生究極の解脱境。孔子は、学問と修養によりこの偉大な境地に到達。東洋における人世の師父とはまこと孔子を言う。

(6) ちなみに、この孔子の言葉から、人の年齢を、十五を「志学^{しがく}」、三十を「而立^{じりつ}」、四十を「不惑^{ふわく}」、五十を「知天命^{ちてんめい}」、六十を「耳順^{じじゆん}」、七十を「従心^{じゆうしん}」の年と言うようになった。

2011年6月6日林明夫記

為政第二

孟武伯問孝。

子曰、父母唯其疾之憂。

もうぶはく こう と
 孟武伯、孝を問う。

しい ふう ぼ ただ そ やまい こ うれ
 子曰わく、父母は唯其の疾を之れ憂う

(2-22)

< 孟武伯、孝を問う。 >

Q：「孟武伯、孝を問う」とは何ですか。

A：(1)「魯の国の家老の子であった孟武伯が、ある時、孔子に孝を尋ねた」の意。
 (2)「孟武伯が、孝とはどうすることかと質問した」の意。

< 子曰わく、父母は唯其の疾を之れ憂う >

Q：「子曰わく、父母は唯其の疾を之れ憂う」とは何ですか。

A：(1)「孔子が言った。父であれ、母であれ、両親というものは、子供の病気のことばかり心配しているものだ(だから、子供は、親のその心にそって、自分の健康に留意するのが、親孝行というもの。)」の意。
 (2)「これに対して孔子は、父母は何にもまして、ただ子供の病気のみを心配しているのだから、身体を大切に、健康であることが孝行であると答えた」の意。
 (3)この文章には、次のような異説がある。つまり「其疾」を父母の病気とみて、父母の病気をひたすら心配して親が病気にかからないようにと常に憂えるのが孝行だという説。ただ、子供の病気ほど心配なことはない。やはり、丈夫で健康な身体をつくるということが親孝行の第一義。もちろん、親の憂えとなるような悪いことをなすべきではないことは、いうまでもない。

2011年6月20日林明夫記

為政第二

子游問孝。子曰、今之孝者、是謂能養。
至能有養。不敬、何以別乎。

子游、孝を問う。子曰わく、今の孝は、是れ能く養うを謂う。
犬馬に至るまで、皆能く養うこと有り。敬せずんば、何を以て別たんや。

(2-23)

<子游、孝を問う。>

Q:「子游、孝を問う。」とは何ですか。

A: (1)「ある時、門人の子游が孝について尋ねた。」の意。
(2)「子游が孝を質問した」の意。

<子曰わく、今の孝は、是れ能く養うを謂う>

Q:「子曰わく、今の孝は、是れ能く養うを謂う」とは何ですか。

A: (1)「孔子は答えた。現今世間では、親に対して、目に見えた奉仕をすることが孝であると考えている」の意。
(2)「このごろの孝は、よく親を養えばよいということのようだ」の意。
(3)「能養」とは、飲食、衣食、住居などに、不自由のない生活をさせて善くつかえること。

<犬馬に至るまで、皆能く養うこと有り>

Q:「犬馬に至るまで、皆能く養うこと有り」とは何ですか。

A: (1)「しかし、奉仕するという事だけならば、犬や馬だって人間に奉仕する。」の意。
(2)「しかし、犬や馬であっても飼う以上は能く養っているではないか」の意。
(3)「能有養」とは、犬や馬も人からよく養われている。(2)の説。
・ただ「犬は守禦し、馬は以て勞に代る。皆人を養ふ者」といって犬馬に至るまで人を養う。従って、養うだけでは犬馬と異なるところが無いというのが(1)の説。

<敬せずんば、何を以て別たんや。>

Q:「敬せずんば、何を以て別たんや」とは何ですか。

A: (1)「敬う心がなかったなら、どうして犬や馬と区別できるだろうか」の意。
(2)「親が尊敬する心がなかったら、何で親と犬馬とを区別しようぞ。親に対しては、愛敬の心を持って尊ぶことが大切で、よく養うだけでは親不孝ともなるのだ」の意。
(3)「敬」とは、心に敬意を以て尊ぶこと。

2011年6月20日林明夫記

為政第二

子曰、温故而知新、
 可以為師矣。

^し ^い ^わ ^く、^{ふる} ^し ^た ^ず ^あ ^た ^ら ^し
 子曰わく、故きを温ねて新しきを知らば、
^も ^つ ^し ^た
 以て師為るべし。

(2-27)

<子曰わく、故きを温ねて新しきを知らば、以て師為るべし>

Q：「子曰わく、故きを温ねて新しきを知らば、以て師為るべし」とは何ですか。

A：(1)「孔子が言った。過去のことを考え究め、それを取捨し、選択したものをもとにして、現在及び将来のことを考える、そうした考え方をする人は、他の模範となり得る人である」の意。

(2)「先人の述べた学、いわゆる過去の事柄や学説などを謙虚に学びとり、思い究めながら、そこから現実にふさわしい新義が発見できるようになれば、人の師表となる資格があるものだ」の意。

(3)伝統にばかりこだわると頑固にすぎる。過去を否定し、新しいことばかりにこだわると、時流に流される。

(4)「温」は「タズネル」と読むほかに、「アタタム」と読むことも。重ね習いて、十分熱すること。研究の意。

(5)「故き」は「旧」の意。典故、故事などの故で、自分より前に出た人の学説や、過去の事象は皆「故」。勿論、古典も「故」。

(6)「知新」とはね新義を知る、新義発見。

(7)「以て～べし」とは、「～の資格がある」、「ねうちがある」の意。

(8)人の師たる者は、「温故」に停滞してもいけないし、新奇をてらって「知新」に先走ってもいけない。「温故」だけでは、いかに広くとも百科事典にすぎない。「新奇」だけでは、人を誤らせ、堅実味がない。須らく、過去の事柄や学説を十分究めて遺漏なきを期すると共に、現実に即応した新しいものを発見・発明して、宇宙の変化に応じ、進化の原則に順わなくては、学問の意義がない。

為政第二

子曰、君子不器。

子曰わく、君子は器ならず。

(2-28)

<子曰わく、君子は器ならず>

Q: 「子曰わく、君子は器ならず」とは何ですか。

A: (1) 「孔子が言った、器(うつわ)はすべて、ある目的のための専用につくられるもの。しかし、学徳ともすぐれた君子と言われる人物は、ある一つのことだけの専門であってはならない」の意。

(2) 「学徳の備わった君子は、一芸一役の用をなしうるだけの器^{うつわ}ではない。器を用いる働きのある人間である」の意。

(3) 「君子」とは、「徳を身に具えた立派な人」の意。

(4) 「器」とは、机、椅子、茶器のような1つのことに役立つ器のこと。また、機械の意。人間でも、一役一芸にのみ役立って他のことに役立たぬ人は器。

(5) 「器ならず」とは、そのようなものであってはならないということ。

(6) 人の修養は最初から不器の器とはなれない。まず一器としての完成を志し、一役一職の完行を心がけなければならない。一事に長ずる者は、万事にも長ずとも言う。一事に長じない者は、他事にも長じ得ることはできない。宜しく、それぞれの才能に応じてその能力を尽くし、その各人の完成を期して努めれば、人間性の靈妙さは、その人それなりに不器の器となり得る。

2011年6月7日林明夫

為政第二

子貢問君子。

子曰、先行其言、而後從之。

子貢、君子を問う。

子曰わく、先ず其の言を行い、而る後之れに従う。 (2-29)

<子貢、君子を問う>

Q：「子貢、君子を問う」とは何ですか。

A：(1)「孔子の門人の子貢が、学徳ともにすぐれた君子と言われる人物について尋ねた」の意。
(2)「子貢が君子はどんな人かと問うた」の意。

<子曰わく、先ず其の言を行い、而る後之れに従う>

Q：「子曰わく、先ず其の言を行い、而る後之れに従う」とは何ですか。

A：(1)「それに対して孔子が答えた。あることについて、あれこれ言う前に先ず行うこと。行った後に、言うことがあれば言う。不言実行。それが君子なのだ」の意。
(2)「言わんとするところを先ず行って、然る後に言うのが君子である」の意。
(3)「先行其言」とは、言わんとすることがあったら、まず先にこれを行う。
(4)「而後從之」とは、しかる後に言之に従うの意。実行してから後に言う。「後」の下に「言」を入れて解釈する。
(5)子貢は口が達者で言語の科の第一人者であった。言行一致を困難とする子貢に対しては、極めて適当な答弁。孔子が門人の機根に応じて教えたことの片鱗がここにも見られるといわれる。

2011年6月7日林明夫

為政第二

子曰、君子周而不比、
小人比而不周。

子曰わく、君子は周して比せず、
小人は比して周せず。

(2-30)

<子曰わく、君子は周して比せず>

Q：「子曰わく、君子は周して比せず」とは何ですか。

- A：(1)「孔子が言った。学徳ともにすぐれた君子は、周する(差別なく、誰とも、ひろく公平に交わる)が、決して比する(片よって交わる)ことはない」の意。
 (2)「有徳の人(君子)は、義によって広く公平に親しみ交わり、決して分け隔てをしない」の意。
 (3)「周」とは、義に従って広くあまねく公平に親しみ合うこと。「比」とは、利害や感情によって都合のよい者とのみ親しみ合うこと。
 (4)「周」と「比」で、君子と小人の交際の仕方がよく区分される。

<小人は比して周せず>

Q：「小人は比して周せず」とは何ですか。

- A：(1)「学徳のない、器小なる小人は、その逆である」の意。
 (2)「之に反して、徳の修まらない小人は、利害や感情に制せられて、片寄った交わり方をし、広く公平に交際できないものだ」の意。
 (3)論語の文では周と比と二字が相対して用いられて、周は善い意味であり、比は悪い意味を表している。

2011年6月7日林明夫

為政第二

子曰、学而不思則罔、
思而不学則殆。

し い わく、 まな おも すなわ くら
子曰わく、学^{まな}びて思^{おも}わざれば則^{すなわ}ち罔^{くら}く、
おも まな すなわ あやう
思^{おも}いて学^{まな}ばざれば則^{すなわ}ち殆^{あやう}し。

(2-31)

<子曰わく、学^{まな}びて思^{おも}わざれば則^{すなわ}ち罔^{くら}>

Q : 「子曰わく、学^{まな}びて思^{おも}わざれば則^{すなわ}ち罔^{くら}」とは何ですか。

- A : (1) 「孔子が言った。視たり、聴いたりして他から学んだことを、自分なりに思考しなかったなら、道理にくらいものになってしまう」の意。
- (2) 「博く学ぶだけで自分の心で思いめぐらしてよく考え、よくその理をもとめてみないと、学んだことがぼんやりしていて、その道理をつかむことができない」の意。
- (3) 「学」とは、他にならい学ぶこと。読書。
- (4) 「思」とは、思索研究すること。
- (5) 「罔」とは、くらいこと。「惘」と同じで、理にくらく明るくなれないこと。はっきりその道理がつかめないこと。

<思^{おも}いて学^{まな}ばざれば則^{すなわ}ち殆^{あやう}>

Q : 「思^{おも}いて学^{まな}ばざれば則^{すなわ}ち殆^{あやう}」とは何ですか。

- A : (1) 「逆に、他から学ぶことをせず、ただ自分だけで思考するならば、独善におちいる危険性がある」の意。
- (2) 「之に反して、自分の乏しい知識で思いめぐらすだけで、博く他人の言や古人の考えを学ぶことをしないと考え方が狭く、一方に偏^{かたよ}って、危険この上もないものだ」の意。
- (3) 「殆^{あやう}し」とは、「危」と同じで、あぶないこと。主観的な思索だけに頼って客観的な博い裏づけがないと、見解が固陋になって危険であるの意。
- (4) 学問をするには、学つまり読書と思索が伴わなければならない。学つまり他にならい学ぶこと、読書に加えて、沈潜思索して自己のものを生み出すことの大切さ。

2011年6月7日林明夫

為政第二

子曰、由、誨女知之乎。
 知之為知之、不知為不知。
 是知也。

子曰わく、由、女に之れを知^しることを誨^{おし}えんか。
 之れを知^しるをば之れを知^しると為^なし、知らざるをば知らずと為^なす。
 是れ知^しるなり。

(2-33)

<子曰わく、由、女に之れを知^しることを誨^{おし}えんか>

Q：「子曰わく、由、女に之れを知^しることを誨^{おし}えんか」とは何ですか。

A：(1)「孔子が門人の子路(由)に対して言った。お前に、ほんとうの認識とは、どういうことかを教えよう」の意。

(2)「お前に、ものごとを知^しるということ^をを教えようか」の意。

(3)「由」とは、姓は仲、名は由。字を、子路または季路と言った。魯の人で、孔子より九歳の年少であった。孔門第一級の武勇の士で、孔子はその人となり^をを愛した。正直者であり、勇を好み、情熱的な人であったが、ものを速断する欠点があった。子路の率直と武勇は、ややもすると思慮の足りないことがあって、しばしば孔子から注意されている。

(4)「女」は「汝」と同じ。

(5)「誨^{おし}える」は「教^{あきら}える」とほぼ同じ。暁かにおしえること。

<之れを知^しるをば之れを知^しると為^なし、知らざるをば知らずと為^なす。是れ知^しるなり>

Q：「之れを知^しるをば之れを知^しると為^なし、知らざるをば知らずと為^なす。是れ知^しるなり」とは何ですか。

A：(1)「それは、真に認識したことと、未だ完全には認識していないこととを区別できること。それが、ほんとうの認識ということである」の意。

(2)「自分の知っていることは知っているとし、知らないことはまだ知らない^と、心にはっきりさせる。これが本当に知^しるということだ」の意。

2011年6月7日林明夫

里仁第四

子曰、唯仁者、能好人、能恶人。

子曰わく、唯^{ただ}仁^{じん}者^{しや}のみ能^よく人^{ひと}を好^よみ、能^よく人^{ひと}を悪^{にく}む。

(4-69)

<子曰わく、唯仁者のみ能く人を好し、能く人を悪む>

Q：「子曰わく、唯だ仁者のみ能く人を好し、能く人を悪む」とは何ですか。

A：(1)「孔子が言った。ただ仁者(人間愛をもつ者)だけが、公平に人を愛することもできれば、公平に人を憎むこともできる」の意。

(2)「ひとり仁者だけがその心が公平無私だから、好むべき人を好み、悪むべき人を悪むことができるものだ」の意。

(3)憎愛の念は何人にもある。小人は私心があるために、その憎愛の情の現れに偏^{かたよ}ったものがある。仁徳に徹した人は心が明鏡の如くであるから、善悪を見誤ることもないし、好むべき善を好み、悪むべき悪を悪む。悪むといっても人を悪むのではなく、その悪を悪むのである。

2011年6月9日林明夫記

里仁第四

子曰、苟志於仁矣、無惡也。

しわわく、いやし じん こころざ あ せば、あしきこと無し。
子曰わく、苟くも仁に志せば、悪しきこと無し。

(4-70)

<子曰わく、苟くも仁に志せば、悪しきこと無し>

Q：「子曰わく、苟くも仁に志せば、悪しきこと無し」とは何ですか。

A：(1)「孔子が言った。仮りに、仁(人間愛)を心に持つことを志したなら、その人においてすべての悪はなくなるだろう」の意。

(2)「ほんとうに仁にさえ志しておれば、悪の芽生える憂いはない」の意。

(3)「ほんとうに真剣になって仁に志しておれば、たとえ不用意の過ちはあっても、みずから悪をしようとする芽生えはおきない」

(4)「苟」は「イヤシクモ」と読んで、「かりそめ」の意。「マコトニ」と読み、「誠」の意に解することもある。

(5)「志」とは心の行くところ。

(6)「無悪」は、「悪しきことなし」と読む。

2011年6月9日林明夫記

里仁第四

子曰、朝聞道、夕死可矣。

し い わく、 あした みち き 朝に道を聞かば、 ゆうべ し か 夕に死すとも可なり。

(4-74)

<子曰わく、朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり>

Q：「子曰わく、朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり」とは何ですか。

- A：(1)「孔子が言った。その日の朝、正しい道を悟り得たとしたら、その日の夕方、死んだとしても満足である。(道を悟り得なかったなら、長生しても、何の意味もないものになってしまう)」の意。
- (2)「もし朝方に我々が当然行わなくてはならぬ人たりの道を聞くことができたなら、かりにその晩死んでもよろしい」の意。
- (3)「聞道」の「道」とは、「事物当然の理」のこと。人にとっては、人のふまねばならぬ当然の道。人としてかくあるべき道」の意。
- (4)「朝・夕」は短い時間の意を表す。
- (5)「可なり」は、まあよろしい、まあ満足してよい。
- (6)人生の目的は、道を聞いて、之を体得し、実現することを似て終わりとする。君子たるものは道を聞くことができたなら、いつ終わりを迎えてもよい。

2011年6月8日林明夫記

里仁第四

子曰、士志於道、而恥悪衣悪食者、
未足与議也。

子曰わく、士、道に志して、悪衣悪食を恥ずる者は、
未だ与に議るに足らず。

(4-75)

<子曰わく、士、道に志して、悪衣悪食を恥ずる者は>

Q:「子曰わく、士、道に志して、悪衣悪食を恥ずる者は」とは何ですか。

- A: (1)「孔子が言った。士(道德の修養に志す人)たる人物で、その修養に志しながら、着衣や食物の粗末さを恥かしいと思う者がいたとしたら」の意。
 (2)「仁義道德の道に志して、学問修養をしているいわゆる士といわれる者で、衣服や食事のみすばらしいのを恥じるようでは」の意。
 (3)「士」とは、「道に志し、学問修養をしている者」の意。
 (4)「志す」とは、「心がある目的に向かって動いていること」をいう。

<未だ与に議るに足らず>

Q:「未だ与に議るに足らず」とは何ですか。

- A: (1)「私と一緒に、道について論ずる資格はない」の意。
 (2)「まだまだ一緒に道を論ずる資格はない」の意。
 (3)「議る」とは、「論じ合う」の意。
 (4)人にして立志修学の努力をする者を広く士と称する。立志修学の人には目的が道に在り、学問に在るから粗衣粗食を恥としない。

2011年6月13日林明夫記

里仁第四

子曰、放於利而行、多怨。

子曰わく、利りに放よりて行おこなえば怨うらみ多おほし

(4-78)

<子曰わく、利に放りて行えば怨多し>

Q：「子曰わく、利に放りて行えば怨多し」とは何ですか。

A：(1)「孔子が言った。利益ばかりを考えて行動したら、人の怨みを受けることが多い」の意。

(2)「自分の利益本位で行動すると、人から怨まれることが多い」の意。

(3)「利」とは、「利益、便利、自分の都合のよいこと」の意。

(4)「放る」とは、「依る」と同じ。よりそう。もたれかかる。

(5)自分の利のみ考えていると、他人の利と相反し衝突することが多い。怨みを招く理由がある。

2011年6月13日林明夫記

里仁第四

子曰、不患無位、患所以立。
不患莫己知、求為可知也。

子曰わく、位無きを患えず、立つ所以を患う。
己を知ること莫きを患えず、知らるべきことを為すを求むるなり。

(4-80)

<子曰わく、位無きを患えず、立つ所以を患う>

Q:「子曰わく、位無きを患えず、立つ所以を患う」とは何ですか。

- A: (1)「孔子が言った。自分の社会的地位のないことを悩むことはない。それよりも、地位に立つための人間性がないからであることを、悩むことだ」の意。
(2)「自分の地位の無いのを心配せずに、いかにしたらその地位に立つに足り得るか、実力のないことを悩め」の意。
(3)「位」とは、政治をとる高い身分・地位。
(4)「立つ所以」の「所以」とは理由。「立つ所以」とは立ちうるだけの理由。

<己を知ること莫きを患えず、知らるべきことを為すを求むるなり>

Q:「己を知ること莫きを患えず、知らるべきことを為すを求むるなり」とは何ですか。

- A: (1)「また、世間の人、自分の真価を認めてくれないことを悩むことはない。それよりも、人から認められるだけの行いをするよう、心がけることだ」の意。
(2)「また、世人が自分の価値を知ってくれないのを心配せずに、知られるだけのことをしてやろうとつとめるべきだ」の意。
(3)「可知」とは、「知られるねうちがある、資格がある」の意。
(4)孔子はあくまでも地位名聞を否定しない。その地位名聞を得るにふさわしい人物になれという。実質主義である。

2011年6月13日林明夫記

里仁第四

子曰、君子喩於義、
小人喩於利。

子曰わく、君子は義に喩り、
小人は利に喩る。

(4-82)

< 子曰わく、君子は義に喩り >

Q : 「子曰わく、君子は義に喩り」とは何ですか。

- A : (1) 「孔子が言った。学徳ともにすぐれた君子と言われる人物は、義(道理にかなった正しいこと)に敏感であり」の意。
- (2) 「君子は物事に対して、すぐ道義を標準にして理解するが」の意。
- (3) 「君子・小人」とは、智と徳の有無をもって言う。
- (4) 「喩る」とは、「暁る」と同じ。すみやかに覚ること。理解すること。
- (5) 「義」とは、「自然の理にかなうこと」。道義、義理。

< 小人は利に喩る >

Q : 「小人は利に喩る」とは何ですか。

- A : (1) 「学徳のない、器小なさる小人は、利益に敏感である」の意。
- (2) 「小人は万事に対して、すぐ利になるかならぬかというように覚るものだ」の意。
- (3) 「利」とは、「利益、己の身を利すること、欲望にかなうこと」。

君子・小人

- ・何事も正しい義理を標準として考えていく者は君子。
利害に結びつけて物事を解決する者は小人。
階級意識で、君子と小人という種別を言ったものではない。
- ・同じ飴でも、老いた父母を養うのによいと思うのは君子。引き戸の下に流してやると音がしないで戸が開くと思うのは小人。
- ・村の豪農の蔵に米が満ち満ちているのを見て、飢餓の年にはこの村には餓死者が出ないと考えるのは君子。飢餓の年には大儲けができると覚るのは小人。

2011年6月13日林明夫記

里仁第四

子曰、見賢思齊焉、
見不賢而内自省也。

子曰わく、賢けんを見みては齊ひとしからんことを思おもい、
不賢ふけんを見みては内うちに自みら省みる。

(4-83)

<子曰わく、賢を見ては齊しからんことを思い>

Q：「子曰わく、賢を見ては齊しからんことを思い」とは何ですか。

A：(1)「孔子が言った。すぐれた人物を見たら、自分も、その人物と同じようになりたいと思いの意。

(2)「己にまさったすぐれた人を見ては、自分もこのような人になろうと思いの意。

(3)「賢」とは、「賢人というよりは、自分よりも知徳のすぐれた人」の意。

(4)「齊」とは、「等」と同じ。

<不賢を見ては内に自ら省みる>

Q：「不賢を見ては内に自ら省みる」とは何ですか。

A：(1)「劣った人を見たら、自分にも、その人と同じような所はないか、反省してみることだ」の意。

(2)「つまらぬ人を見ては、自分もこのようではないかと反省する」の意。

(3)「内に自ら省みる」とは、自分にもかくの如ごときところはないかと心に反省する」の意。自省。

- ・自分よりもまさった偉い人を見ては、羨み、またはおそれ、とても自分には及びがたいとすることなく、これに倣ならい、努力して自分もまたこのような人になろうとする。
- ・自分よりも劣る人を見ては、これを嘲笑したり、責めたりしないで、自分にもこのような愚かさがありはしないかと反省せよ。
- ・孔子は、弟子たちに向かってかく教えるとともに、常に自らもかく行って、あの偉大さを成し遂げた。

里仁第四

子曰、古者言之不出、
恥躬之不逮也。

子曰わく、いにしえ げん 言を出ださざるは、
躬の逮ばざるを恥ずればなり。

(4-88)

<子曰わく、古、言を出ださざるは>

Q:「子曰わく、古、言を出ださざるは」とは何ですか。

A: (1)「孔子が言った。古の人が、軽々しく言葉を口に出さなかったのは」の意。
(2)「昔の人が軽々しく言葉を出さなかったのは」の意。

<躬の逮ばざるを恥ずればなり>

Q:「躬の逮ばざるを恥ずればなり」とは何ですか。

A: (1)「自分の行為が、言葉におよばないことを恥じとしたからである」の意。
(2)「自分の実行が言葉に伴わないのをおそれたのである」の意。
(3)昔の人にも饒舌家もあり、寡黙の人もあった。君子のみ言行一致を旨として言葉を慎んだ。

2011年6月16日林明夫記

里仁第四

子曰、君子欲訥於言、
而敏於行。

しい 子曰わく、くんし げん とつ 君子は言に訥にして、
あこない びん 行に敏ならんことをほつ欲す

(4-90)

<子曰わく、君子は言に訥にして>

Q：「子曰わく、君子は言に訥にして」とは何ですか。

A：(1)「孔子が言った。学徳ともにすぐれた君子は、口下手ではあるが」の意。

(2)「君子たる者は、口はぶちようほう不調法で、訥弁でもいいが」の意。

(3)「訥」とは、言葉の出るのが遅いこと。

<行に敏ならんことを欲す>

Q：「行に敏ならんことを欲す」とは何ですか。

A：(1)「行動の実践には、すばやく対応しようと心がけるものだ」の意。

(2)「実行は敏活でありたいな」の意。

(3)「敏」とは、事をすばやく行うこと。

(4)訥弁と敏速はその天性の気質に出る者であろうが、言の軽い者は訥を志して言葉を慎み、行いの遅鈍な者は敏を以てこれを励ますことは、自分の心がけ一つで出来ることだ。君子の学はこれを以て貴しとする。

2011年6月16日林明夫記

里仁第四

子曰、徳不孤、
必有鄰。

子曰わく、徳は孤ならず、
必ず鄰有り。

(4-91)

<子曰わく、徳は孤ならず>

Q：「子曰わく、徳は孤ならず」とは何ですか。

A：(1)「孔子が言った。人格者は一人ぼっちではない」の意。
(2)「有徳者というものは決して孤立するものではなく」の意。

<必ず鄰有り>

Q：「必ず鄰有り」とは何ですか。

A：(1)「必ずその人格にひかれ、それを仰ぎ、それに共鳴する人がいるものである」の意。
(2)「人には必ず隣人があるように、これに共鳴する人が出来るものだ」の意。
(3)「有鄰」とは、親しむ者有りの意。鄰は親の如し。家に隣家があるように、徳には必ず志を同じくする者がある。朋有り遠方より来る。

2011年6月16日林明夫記

公冶長第五

子曰、已矣乎。
 吾未見能見其過、
 而内自訟者也。

し い や
 子曰わく、已んぬるかな。
 われいま よ そ あやまち み
 吾未だ能く其の過を見て、
 うち みずか せ もの み
 内に自ら訟むる者を見ざるなり。

(5-119)

<子曰わく、已んぬるかな>

Q：「子曰わく、已んぬるかな」とは何ですか。

A：(1)「孔子が言った。世も末じゃ」の意。

(2)「ああ、なんとも仕方のないことで、もうだめだなあ」の意。

(3)「已矣乎」とは、もうだめだ。なんとも仕方がない。深く嘆く言葉。

<吾未だ能く其の過を見て、内に自ら訟むる者を見ざるなり>

Q：「吾未だ能く其の過を見て、内に自ら訟むる者を見ざるなり」とは何ですか。

A：(1)「自分の過失を自覚して、しかも、自分の心の中で、自分をせめる者を、見たことがないのだ」の意。

(2)「わしはまだ、自分でよく自分の過ちを発見して、自分の心の中で自分を責めているような、自責の念の強い人を見たことがないなあ」の意。

(3)「訟」とは、口には出さないが、心に深くとがめ責めること。本来、「訟」は人の罪を責め立てることであるが、ここでは、自分の罪をそのように責めること。

(4)この章は、時代に対する詠嘆的絶望の語。明君なく、賢人なく、礼廃れ、道行われず、権臣専横、民衆辛苦の世に絶望した孔子の語か。

雍也第六

子曰、人之生也直。

罔之生也幸而免。

子曰わく、人の生くるや直ればなり。
 之れ罔くして生くるは、幸にして免るるなり。

(6-137)

<子曰わく、人の生くるや直ればなり>

Q:「子曰わく、人の生くるや直ればなり」とは何ですか。

A: (1)「孔子が言った。人が生きている価値は、正直だからである」の意。

(2)「人がこの世に生まれていられるのは直、すなわち、すなおさによってである」の意。

(3)「直」とは、誠、正義、すなおさ、正直。

<之れ罔くして生くるは、幸にして免るるなり>

Q:「之れ罔くして生くるは、幸にして免るるなり」とは何ですか。

A: (1)「もしも、正直さが無くて生きている者があるとしたら、まさに偶然の幸いで、不幸から免れて生きているにすぎない」の意。

(2)「この直、すなわち、すなおさがなくて、生きていけるのは、まぐれにさいわいを得て、難を免れたというものだ」の意。

(3)「幸」とは、僥倖ぎょうこう、ほとんど期待できないような幸運(僥幸とも書く)。

(4)「免」とは、禍を免れる、天罰を免れる。

(5)孔子のこの言葉の内容が、哲学的な発達をとげて孟子の性善説へと展開していく。

雍也第六

子曰、知之者、不如好之者。
好之者、不如樂之者。

子曰わく、之れを知るものは、之れを好む者に如かず。
之れを好む者は、之れを楽しむ者に如かず。

(6-140)

<子曰わく、之れを知る者は、之れを好む者に如かず>

Q:「子曰わく、之れを知る者は、之れを好む者に如かず」とは何ですか。

A: (1)「孔子が言った。ある物事について、それを単に知っている者は、それを好む者には及ばない」の意。

(2)「知るということだけでは、まだ、これを愛好することに及ばない」の意。

(3)「知」とは、事の実在を知る。対象を知る。

(4)「之」は何を指してもよい。道と限る必要はないが、道とすれば、わかりやすい。

(5)「不如」とは、及ばない。

(6)「好」とは、すきになる。知ったものへの特別な感情を寄せること。

<之れを好む者は、之れを楽しむ者に如かず>

Q:「之れを好む者は、之れを楽しむ者に如かず」とは何ですか。

A: (1)「しかし、それを好む者だって、その物事について楽しむ者には及ばないのだ」の意。

(2)「愛好するということは、これを楽しむということには及ばない」の意。

(3)「楽」とは、自他融合して一体となった悦楽の状態。

(4)人生に生きるということを知る。生きていることを好む。生きることを楽しむ。人生を楽しむ人は幸せ。富貴にならなくても、人生を楽しむ人物になりたいものかの意か。

2011年6月20日林明夫記

雍也第六

子曰、中庸之徳也、其至矣乎。
民鮮久矣。

子曰わく、中庸の徳為るや、其れ至れるかな。
民鮮きこと久し。

(6-149)

<子曰わく、中庸の徳為るや、其れ至れるかな。民鮮きこと久し>

Q : 「子曰わく、中庸の徳為るや、其れ至れるかな。民鮮きこと久し」とは何ですか。

A : (1) 「孔子は言った。中庸(常に、公平で、過不足や、上下左右のかたよりのない)最高の徳性が、人々の心の中から、無くなってから久しくなった」の意。

(2) 「過ぎることもなく、及ばぬこともなく、しかも偏らないで、終始変わらないところの中庸ということの、人間の道徳としての価値は最上至極のものである。然るにすでに久しい間にわたって、この徳を行える人が少ないことは、まことに嘆かわしいことだなあ」の意。

(3) 「中庸」の「中」とは、過ぎたこともなく、及ばぬこともなく、どちらにもかたよらぬ、中正を得たこと。

・「庸」とは常で、常恒の意。いつまでも変わらないこと。

・常識的にいえば、穩健中正で、永久に変わらない道徳のことを中庸という。

2011年6月20日林明夫記

述而第七

子曰、不憤不啓。不悱不発。
 挙一隅、不以三隅反、則不復也。

子曰わく、ふん憤せざれば啓けいせず。ひ悱せざれば発はつせず。
いちくう一隅をあ挙ぐるに、さんくう三隅を以てもつ反さざれば、かえ則ち復たすなわびせふたざるなり

(7-158)

<子曰わく、憤せざれば啓せず>

Q：「子曰わく、憤せざれば啓せず」とは何ですか。

A：(1)「孔子が言った。私は、学問に対して、ふるい立つほどの情熱をもたない者には、教え導くことはしない」の意。

(2)「教えを受けんとする者で、自らの心に求め、疑問の解決に向かって情熱がもりあがるようにならなければ、これをひらき教えてやろうとはしない」の意。

<悱せざれば発せず>

Q：「悱せざれば発せず」とは何ですか。

A：(1)「また、わかっていながら、それを口に出せないで、もどかしく思うほど積極性を示さない者にも、教えることはしない」の意。

(2)「言うべき内容もできて、言いたくてもうまく言えなくて、口をモグモグさせる程度まで進まない、ひらき導いてやらない」の意。

<一隅を挙ぐるに、三隅を以て反さざれば、則ち復たびせざるなり>

Q：「一隅を挙ぐるに、三隅を以て反さざれば、則ち復たびせざるなり」とは何ですか。

A：(1)「さらに、例えて言えば、四角の一隅について教えてやった場合、それを基にして、それを更に自分なりに押しひろめた他の三つの隅についてまで、自分から進んで返答して来ないようでは、重ねて教えることはしないだろう」の意。

(2)「たとえば、四角なものを教えるにしても、一隅を持ち上げてみせると、他の三つの隅を自分から類推して反応を示すようであれば、重ねて教えることはしない。(相手がまだ理解するだけの成熟さに達していないから、静かに相手の積極的な成熟を待つより外にないのだ)」の意。

(3)有名な啓発教育という語の出典。教育や学問というものは、自ら志し、それに対して、ほとばしるほどの情熱を持たなくてはならない。教育や学問というものは、畢竟無きものを与えるのではなくて、潜在のものを導き出して、在るものに眼を開かすことである。孔子はこの教育理論をはっきりつかみ、自らも発憤し、弟子たちも発憤せしめたのである。憤を発し、悱を発しなければ教えない。四角の一を聞いて、すぐ他の三を以て反応するほどの熱意と類推力のない者には二度と教えないよとつっぱねながら、孔子は、弟子の反応を期待をこめて見守った。

2011年6月20日林明夫記

述而第七

子曰、飯疏食飲水、曲肱而枕之。

樂亦在其中矣。

不義而富且貴、於我如浮雲。

し い わく、そし くら みず の ひじ ま こ まくら
 子曰わく、疏食を飯い水を飲み肱を曲げて之れを枕とす。

たの しみ も ま た そ の うち あ
 楽しみも亦た其の中に在り。

ふ ぎ と み か と お と わ れ お ふ う ん こ と
 不義にして富且つ貴きは、我に於いて浮雲の如し。

(7-165)

<子曰わく、疏食を飯い水を飲み肱を曲げて之れを枕とす。楽しみも亦た其の中に在り>

Q:「子曰わく、疏食を飯い水を飲み肱を曲げて之れを枕とす。楽しみも亦た其の中に在り」とは何ですか。

- A: (1)「孔子が言った。食べ物粗末なもの、飲むものは水、そして肱枕で寝るような極貧の生活の中にも、楽しみはある」の意。
- (2)「粗末な飯を食い、水を飲み、腕を曲げて、枕代りとするような貧乏暮らしの中に在っても、道に志すほんとうの楽しみは、おのずからその中にも自然に在るものである」の意。
- (3)「飲水」とは、おいしい汁物のないこと。「肱を曲げて枕」とは、うで枕のこと。

<不義にして富且つ貴きは、我に於いて浮雲の如し>

Q:「不義にして富且つ貴きは、我に於いて浮雲の如し」とは何ですか。

- A: (1)「また不正な手段で得た財産と地位は、身につくものではなく、浮雲のように、すぐに無くなってしまふものだ」の意。
- (2)「不正不義などをして得た富貴などは、わたしにとっては、浮かべる雲のごとく、はかないものだ」の意。
- (3)大切なのは、「楽しみその中に在り」という心に楽しみのあること。心に楽しみが無い生活に「不正不義に陥るな」と大声しても、その効果は期待できない。

2011年6月21日林明夫記

述而第七

子曰、我非生而知之者。
好古敏以求之者也。

子曰わく、我われは生うまれながらにして之これをししる者ものに非あらず。
古いにしえを好このみ、敏びんにして以もつて之これを求もとめたる者ものなり。

(7-167)

<子曰わく、我は生れながらにして之れを知る者に非ず>

Q：「子曰わく、我は生れながらにして之れを知る者に非ず」とは何ですか。

A：(1)「孔子が言った。私は生れながらにして道を知っている天才ではない」の意。

(2)「自分は決して学ばずして生まれながら道理を知っていた天才でも聖人でもない」の意。

<古を好み、敏にして以て之れを求めたる者なり>

Q：「古を好み、敏にして以て之れを求めたる者なり」とは何ですか。

A：(1)「昔の事柄を好み、怠らず勉学して、求め知ったのである」の意。

(2)「ただ、古の聖人の学を好み、精出して之を求めた者に過ぎない」の意。

(3)「敏」とは、「速」。「汲汲」、やすまずつとめるさま。

(4)何人も努力によって聖賢の域に達し得る能力がある。ただ、大事なのは、「敏」の一字。

敏速に、精出してやらないと、光陰は矢の如くで、間もなく老衰をかこつ時がくるであろう。

2011年6月21日林明夫記

述而第七

子曰、三人行、必有我師焉。

擇其善者而從之、

其不善者而改之。

し い さんになおこな かなら わ し あ
子曰わく、三人行えば必ず我が師有り。

そ ぜん もの えら こ したが
其の善なる者を選びて之れに従い、

そ ぶ ぜん もの こ あらた
其の不善なる者は之れを改む。

(7-171)

<子曰わく、三人行えば必ず我が師有り>

Q：「子曰わく、三人行えば必ず我が師有り」とは何ですか。

A：(1)「孔子が言った。自分を含めて三人で行動すると、他の二人の言動には、必ず自分にとって学ぶべき師となるものがある」の意。

(2)「三人の人が同じ道を行けば、必ずその中に自分の師とすべきものがある」の意。

<其の善なる者を選びて之れに従い、其の不善なる者は之れを改む>

Q：「其の善なる者を選びて之れに従い、其の不善なる者は之れを改む」とは何ですか。

A：(1)「二人の言動のよい点は、それを見ならい、よくない点は、それを自分の反省材料とすることができるからだ」の意。

(2)「自分のほかの二人の中の、善なる者を選んで、それを見^{なら}うようにし、不善なる者にかんがみて、自分の不善を改めるようにする。かくすれば、そこに師はきっと得られるものだ」の意。

2011年6月21日林明夫記

述而第七

子以四教。文・行・忠・信。

子、四つを以て教う。文・行・忠・信。

(7-174)

<子、四つを以て教う。文・行・忠・信>

Q：「子、四つを以て教う。文・行・忠・信」とは何ですか。

- A：(1)「孔子は、主として四つのことを教えた。一つは文(学問)、二つは行(実践)、三つには忠(誠実)、そして四つには信(信義)である」の意。
- (2)「孔子は四つの教授要目を以て門人を教育した。古典の講義と、徳の実践。その心の持ち方をいえば忠、すなわち、自分の心のまことをつくす誠実と、信、すなわち、人を欺かない信義のまことである」の意。
- (3)「文」とは、今なら学問のこと。道理を書き表したものをすべて文といたので、先王の教えは皆文である。
- (4)「行」とは、実行。礼を学んで実践に移すことが行。徳行を以て垂範すること。
- (5)「忠」とは、自分のこころのまことを尽くすこと。従って忠は、自分一個についてもいえる。誠実のこと。自己分内のまこと。
- (6)「信」とは、人を欺かないこと。約信のこと。他人との関係においてのまことであること。信義。自他をつなぐものはこの信の徳で、信は、社会徳の根本である。
- (7)「文」と「行」は学問と実践で、その精神的な面からいえば「忠」と「信」。四者並立の四教ではない。根本は「忠」「信」という心の動き。伊藤仁斎はこの四教を孔子学派の家法、万世学問の定式なりと断じている。

述而第七

子曰、仁遠乎哉。
我欲仁、斯仁至矣。

し い じん とお
子曰わく、仁は遠からんや。
われじん ほつ ここ じんいた
我仁を欲すれば、斯に仁至る。

(7-179)

<子曰わく、仁は遠からんや>

Q：「子曰わく、仁は遠からんや」とは何ですか。

A：(1)「孔子が言った。仁(人間愛)の道は、我々の手のとどかない、遠いところにあるものではない」の意。

(2)「仁は人から遠く離れたものであろうか。人から遠いものではない」の意。

(3)仁道は遠くはない。仁は人心なりで、人の本性の働きである。

<我仁を欲すれば、斯に仁至る>

Q：「我仁を欲すれば、斯に仁至る」とは何ですか。

A：(1)「自分が仁の道を求めさえすれば、すぐに仁の道は来るものだ(要は心の持ち方次第だ。)」の意。

(2)「われわれが仁でありたいと思えば、その瞬間、直ちに仁はやってくるものだ」の意。

(3)仏教では「即心是仏」といい「悉く仏性有り」といった。「神は汝らのうちに在り」とキリストが説いたのも同じだ。人間の心の徳以外に、仏も神も仁もない。この大切な心を人は粗末にしてはならない。

述而第七

子曰、奢則不孫、儉則固。
与其不孫也、寧固。

し い おご すなわ ふそん けん すなわ こ
子曰わく、奢れば則ち不孫なり。儉なれば則ち固なり。
そ ふそん むし こ
其の不孫ならんよりは、寧ろ固なれ。

(7-183)

<子曰わく、奢れば則ち不孫なり>

Q：「子曰わく、奢れば則ち不孫なり」とは何ですか。

A：(1)「孔子が言った。人はぜいたくに過ぎると、従順さを失って思いあがり、謙遜することを忘れる」の意。

(2)「奢侈すなわち過ぎた贅沢は不遜になりがちで、おごりたかぶることになる」の意。

(3)「奢」とは、おごる。衣食住などすべて身分をこえて贅沢なこと。

(4)「不遜」とは、礼を失った驕慢さ。

<儉なれば則ち固なり>

Q：「儉なれば則ち固なり」とは何ですか。

A：(1)「儉約に過ぎると、ともすれば頑固になる」の意。

(2)「儉約にすぎるとかたくなになる」の意。

(3)「儉」とは、つづまやか。物にしまりのあること。儉約。

(4)「固」とは、かたくなで、みすばらしいこと。

<其の不孫ならんよりは、寧ろ固なれ>

Q：「其の不孫ならんよりは、寧ろ固なれ」とは何ですか。

A：(1)「どちらかと言えば、思いあがって謙遜することを忘れるよりも、頑固になる方が、まだよいだろう」の意。

(2)「どちらも中正を失ったもので、よいことではないが、不孫であるよりは、むしろ固陋の方がまだよいであろう」の意。

(3)これも、孔子のまことを尊ぶ思想の一連の言葉。

泰伯第八

子曰、学如不及、
猶恐失之。

し い がく およ ごと
子曰わく、学は及ばざるが如くするも、
な こ うしな おそ
猶お之れを失わんことを恐る。

(8-204)

<子曰わく、学は及ばざるが如くするも>

Q:「子曰わく、学は及ばざるが如くするも」とは何ですか。

A: (1)「孔子が言った。学問というものは、自分より先を行く者を、懸命に追いかけるような態度でなければならない」の意。

(2)「学問というものは、追いかけても追いかけても、追いつけないばかりか」の意。

<猶お之れを失わんことを恐る>

Q:「猶お之れを失わんことを恐る」とは何ですか。

A: (1)「それでもなお、追いかける目標を見失う恐れがあるものだ」の意。

(2)「それでもなお、学ぶところを見失いがちな心配があるものだ」の意。

2011年6月22日林明夫記

子罕第九

子在川上曰、
逝者如斯夫。不舍昼夜。

子、川の上に在りて曰わく、
逝者は斯くの如きかな。昼夜を舍かず。

(9-222)

<子、川の上に在りて曰わく>

Q：「子、川の上に在りて曰わく」とは何ですか。

A：(1)「孔子が、川の岸辺に立って言った」の意。

(2)「孔子がある時、川のほとりに居て、流れてやまない川の水をながめて詠嘆しているには」の意。

(3)「川上」とは、川のほとり。

<逝者は斯くの如きかな。昼夜を舍かず>

Q：「逝者は斯くの如きかな。昼夜を舍かず」とは何ですか。

A：(1)「昼も夜も、一瞬もとどまることなく流れ続ける、この川のように、学問もまた、そうであればならない」の意。

(2)「過ぎ去って帰らぬものは、すべてこの川の水のようであろうか。昼となく、夜となく、一刻も止むことなく、過ぎ去っていく。人間万事、この川の水のように過ぎ去り、うつろっていきのだろう」の意。

(3)「逝」とは、ゆきて還らぬの意味の字。

(4)この文はいわゆる「川上の嘆」として有名だが、2つの解釈がある。

1つは、(2)のように川の水の不断の流れの如く、時が過ぎて空しく老いていく我が身を孔子が詠嘆したものと解す。

もう1つは、(1)のように天地の化育、日月の流れは、一息も休むことがないのは、ちょうどこの川の水の昼夜のへだてなく流れて止むことのないのと同じである。この無限の天地の発展、持続の中に人もまた絶えず発展してゆく。学者はこの理を悟って、時々省察して、少しも間断なく努力をしなければならぬ。要するに、詠嘆の悲観の言葉ではなくて、人の進歩についての希望を述べたものと解す。

2011年6月22日林明夫記

子罕第九

子曰、吾未見好徳如好色者也。

子曰わく、吾未だ徳を好むこと、
色を好むが如くなる者を見ざるなり。

(9-226)

<子曰わく吾未だ徳を好むこと、色を好むが如くなる者を見ざるなり>

Q : 「子曰わく、吾未だ徳を好むこと、色を好むが如くなる者を見ざるなり」とは何ですか。

A : (1) 「孔子が言った。私はこれまでに良識的に異性を好むのと同じように、道徳を愛する人を見たことがない」の意。

(2) 「わたしはまだ徳を好むこと、美人を熱烈に好むようにする者を見たことがない」の意。

(3) 「徳」とは、人が天から授かった美しい道徳。

(4) 「色」とは、美人のこと。

(5) 孔子が 57 歳の時に衛にいた。雲公の婦人で美人の評判の高い南子が雲公と車を同じくして市中を逍遙(特に何をするという決った目的も無く、気分転換のために山野や川のふちを歩くこと)した。孔子は次乗を命ぜられやむなくこれに従った。孔子は、この雲公と南子の姿を見てこのことばを發したと、司馬遷は史記に記載。

子罕第九

子曰、歳寒。然後知松柏之後彫也。

子曰わく、としまむく 歳寒して、
しか のち 然る後に、しょうはく しほ おく 松柏の彫むに後るるを知る。

(9-233)

<子曰わく、歳寒して、然る後に、松柏の彫むに後るるを知る>

Q：「子曰わく、歳寒して、然る後に、松柏の彫むに後るるを知る」とは何ですか。

A：(1)「孔子が言った。春夏の季節には、樹木はすべて葉を茂らせているので、区別することはできないが、寒くなると、落葉樹の中にまじる常緑樹である松柏の存在が、はじめてわかる。(それと同じように人間も、危険困難な状況になって、はじめて、その本性がはっきりするものである)」の意。

(2)「時節が寒くなると初めて松や柏かやが、他の草木は枯れしぼむのに、後までしぼまないで残っていることがわかる。このように、大事に遭遇して初めて君子の節操があることがわかるものだ」の意。

(3)「歳寒」とは、気候が寒くなつての意。世の中が乱れたことを喩える。

(4)「松柏」、柏はわが国ではかしわだが、中国ではかや、ひのきなどの常緑樹。

(5)「国乱れて忠臣あらはれ、家貧しくして孝子出づ」ということが言われるが、祖国の混乱や自家の貧窮はありがたくないけれども、どんなことに出合っても変わらぬ節操と、発揮できる価値は持ちたいと念願したのが孔子であった。

子罕第九

子曰、知者不惑、
仁者不憂、勇者不懼。

しい 子曰わく、 ちしや まど 知者は惑わず、
じんしや うれ 仁者は憂えず、 ゆうしや おそ 勇者は懼れず。

(9-234)

<子曰わく、知者は惑わず>

Q：「子曰わく、知者は惑わず」とは何ですか。

- A：(1)「孔子が言った。ものの道理をわきまえている知者は、どのようなことにも惑うことがない」の意。
 (2)「知者は道理に明らかなだから惑わない」の意。
 (3)「不惑」とは、道理にまどわれない。

<仁者は憂えず>

Q：「仁者は憂えず」とは何ですか。

- A：(1)「人間愛をもつ仁者は、どのようなことにも心優えることがないし」の意。
 (2)「仁者は道理に従い、私欲がなく事に善処できるから心配することがない」の意。
 (3)「不憂」とは、心配することがない。

<勇者は懼れず>

Q：「勇者は懼れず」とは何ですか。

- A：(1)「そして、正義を尊び、意志強固な勇者は、どのようなことにも、おそれることがないものだ」の意。
 (2)「勇者は志気が盛んで果敢決行できる者だから懼れるところがない」の意。
 (3)「不懼」とは、心がピクピクしない動揺しない。
 (4)知・仁・勇の三つは、天下の道德なりとは、中庸の第二十章に説くところではうるが、孔子は常に正しい知的判断を失わない仁愛を説き、勇以てこれを行って人世に対処しようとした。本章は、君子の徳としての知・仁・勇の三徳の意義を極めて簡明に説き得たもの。

郷党第十

厩焚。

子退朝曰、傷人乎。

不問馬。

うまや や

厩 焚 け たり。

し ちよう しりぞ い ひと そこ
 子、朝より退きて曰わく、人を傷なえりや、と。

うま と
 馬を問わず。

(10-248)

< 厩焚けたり。子、朝より退きて曰わく、人を傷なえりや、と。馬を問わず >

Q : 「厩焚けたり。子、朝より退きて曰わく、人を傷なえりや、と。馬を問わず」とは何ですか。

A : (1) 「ある時、孔子の家の馬屋が焼けた。役所から帰った孔子は尋ねた。『人に怪我はなかったか』と。その場では馬については尋ねなかった。(孔子は人間を第一に考える人であった)」の意。

(2) 「孔子の家のうまやが火事で焼けた。朝廷を退出して家に帰った孔子は、人に怪我はなかったかとたずねた。それっきりで、馬のことは問いたずねなかった」の意。

(3) 孔子は、馬を愛さない訳ではないが、人を傷つけんことを恐れる方が多かった。故に馬を問う暇がなかったのでは。

顔淵第十二

司馬牛問君子。

子曰、君子不憂不懼。

曰、不憂不懼、斯謂之君子已乎。

子曰、内省不疚、夫何憂何懼。

司馬牛、君子を問う。

子曰わく、君子は憂えず懼れず、と。

曰わく憂えず懼れざる、斯れ之れを君子と謂うか、と。

子曰わく、内に省みて疚しからずんば、

夫れ何をか憂え、何をか懼れん、と。

(12-283)

< 司馬牛、君子を問う >

Q : 「司馬牛、君子を問う」とは何ですか。

A : (1) 「門人の司馬牛が、君子とはどのような人物であるかと尋ねた」の意。

(2) 「司馬牛が君子とはいかなる者でしょうかと問うた」の意。

(3) 「司馬牛」とは、孔子の門人であったが、「多言にして操」、口が軽くて軽率なところがあつたらしい。孔子を殺そうとした司馬桓魋の弟。

< 子曰わく、君子は憂えず懼れず、と >

Q : 「子曰わく、君子は憂えず懼れず、と」とは何ですか。

A : (1) 「孔子は答えた。『何事にも憂えず、何事にも恐れぬのが君子である。』と」の意。

(2) 「『君子は心に心配ごともなく、おそれおののくことのない者である』と答えた」の意。

< 曰わく憂えず懼れざる、斯れ之れを君子と謂うか、と >

Q : 「曰わく憂えず懼れざる、斯れ之れを君子と謂うか、と」とは何ですか。

A : (1) 「さらに司馬牛は尋ねた。『それだけで君子と言えるか。』と」の意。

(2) 「司馬牛が、君子とはもっと高遠な者と思っていたのだろう。孔子の答えが余りにも卑近であるから、不思議に思って、人はただ憂えず懼れず、それだけで君子と言えましようかと再び質問した」の意。

< 子曰わく、内に省みて疚しからずんば、夫れ何をか憂え、何をか懼れん、と >

Q : 「子曰わく、内に省みて疚しからずんば、夫れ何をか憂え、何をか懼れん、と」とは何ですか。

A : (1) 「自分自身の心に、うしろ暗いものがなければ、何事をも憂えたり、恐れたりすることは

ないではないか。」と」の意。

(2) 『『もし人が自分に反省してみて、何もうしろ暗いことがないならば、その人は心配することもなからうし、おそれることもない。かく顧みて少しもやましいことがないということは、君子でなくてはできぬことであるよ』と孔子は答えた』の意。

(3) 「内省不疚」とは、自ら己の心に反省してみて病みなやむことがない。疚は病。気がとがめてなやみ苦しむこと。

(4) 司馬牛の兄は悪人で、孔子を殺そうとしたり、宋で乱をなそうと企てていた。気の小さい司馬牛がこれを心配して常に憂え懼れていた。孔子は、この心情を察して、己に反省して、自分さえやましいことがなかったなら、りっぱな人で君子といえるといって司馬牛を慰め、かつ、教えたかったのであろう。

(5) 憂えず、懼れず、之を君子というのは、心の問題。

子路第十三

葉公語孔子曰、吾党有直躬者。
 其父攘羊、而子証之。
 孔子曰、吾党之直者異於是、
 父為子隱、子為父隱。
 直在其中矣。

しょうこう こうし つ い わ とう ちよくきゆう もの あ
 葉公、孔子に語げて曰わく、吾が党に直躬という者有り。
 そのちちひつじぬす こ こ しやう
 其の父羊を攘みて、子之れを証す、と。
 こうし い わ とう なお もの こ こと
 孔子曰わく、吾が党の直き者は是れに異なり、
 ちち こ たため かく こ ちち たため かく
 父は子の為に隠し、子は父の為に隠す。
 なお そのうち あ
 直きこと其の中に在り、と。

(13-321)

<葉公、孔子に語げて曰わく、吾が党に直躬という者有り。其の父羊を攘みて、子之れを証す、と>

Q：「葉公、孔子に語げて曰わく、吾が党に直躬という者有り。其の父羊を攘みて、子之れを証す、と」とは何ですか。

- A：(1)「楚の国の、葉の地の長官が、孔子に語った。『私の村に、正直者の直躬という者がいる。ある時、その男の父親が羊を盗んで訴えられたら、馬鹿正直にそれを隠さず証言した。』と」の意。
- (2)「葉公が孔子に話しかけて『私の村に正直者の直躬という者がおります。その父が、よその羊が迷いこんだので着服をしたのを、子である自分が役所に証人として訴え出たのですよ』と、人を食ったようなことを言った」の意。
- (3)「葉公」の「葉」とは、春秋時代の楚の一地方で、今の河南省葉県、「葉公」とはその地方の長官で、楚国人望のある重臣であった。
- (4)「直躬」とは、正直者で、名は躬という人。
- (5)「攘」とは、迷いこんだものをそのまま隠しとること、困ること有りて盗むこと、ねこばばすること。
- (6)「証之」とは、証言する。法廷で盗んだことを証言した。

<孔子曰わく、吾が党の直き者は是れに異なり、父は子の為に隠し、子は父の為に隠す。直きこと其の中に在り>

Q：「孔子曰わく、吾が党の直き者は是れに異なり、父は子の為に隠し、子は父の為に隠す。直きこと其の中に在り」とは何ですか。

A：(1)「それに対して孔子は、『私の村の正直者は、それとは違う。たとえ悪事であっても、父

親は子供の為に隠し、子供は父親の為に隠す。そうした、人間本来の、自然の情感を偽らないことが、ほんとうの正直と言うものだ。』と言った」の意。

(2)「孔子がこれに答えて『わたしどもの仲間で、正直というのは、これとは異っています。父親は子どものためにその罪を庇^{かば}って隠してやり、子どもは子どもで、父親のためにその悪いことを隠して庇^{かば}ってやります。かく、親と子が、庇^{かば}い合うところに、真の正直の精神が存しております』とおごそかに言った」の意。

(3)「直在其中」とは、そのままでは正直といえないが、正直の意義はこのうちに存している。

(4)天子となって政治をする人は他にもあろうが、父と子の代役を果たすことのできる者は誰もいない。父子の間は絶対。この真理を無視しては、倫理道徳は成り立たないところに儒家の学説の根本がある。

子路第十三

子曰、君子和而不同。

小人同而不和。

し い くんし わ どう
子曰わく、君子は和して同ぜず。

しょうじん どう わ
小人は同じて和せず。

(13-326)

<子曰わく、君子は和して同ぜず>

Q：「子曰わく、君子は和して同ぜず」とは何ですか。

A：(1)「孔子が言った。学徳ともにそなわった君子と言われる人物は、人達とやわらぎ親しむが、付和雷同(自分にしっかりした意見がなく、軽々しく他人の意見に同調)することはない」の意。

(2)「君子は私心がないから道理に沿って和合しうるが、不合理なことに付和雷同しない」の意。

(3)「和」とは、それぞれの特徴を合わせて、一つに溶け合うこと。

(4)「同」とは、外面だけ他と合わせて同じように見せること。

<小人は同じて和せず>

Q：「小人は同じて和せず」とは何ですか。

A：(1)「学徳のない、器小なる小人は、その逆である」の意。

(2)「小人は、私心私欲があるために、利を見ては雷同しやすく、条理に従って和合するということがない」の意。

子路第十三

子曰、剛毅木訥、近仁。

しい子曰わく、ごうきぼくとつ じん ちが剛毅木訥は仁に近し。

(13-330)

<子曰わく、剛毅木訥は仁に近し>

Q：「子曰わく、剛毅木訥は仁に近し」とは何ですか。

- A：(1)「孔子が言った。剛(私心がなく、無欲なこと)、毅(意志が強く、思いきりのよいこと)、木(=樸、ありのまま、飾り気のないこと)、訥(口べたであること)なる人物は、学徳ともにすぐれた仁者に、ほど近い」の意。
- (2)「剛毅木訥の者は、それが直ちに仁とは言えなくても極めて仁に近いものである」の意。
- (3)「剛」は意志が強い、物欲に屈従しない。欲があっても剛とはいえない(103章)
 「毅」は気性が強くて、果断。
 「木」は朴と同じで、山出しの木のまま。質朴で飾りがないこと。人間のきじのまま。
 「訥」は言葉のへたなこと。口数の少ないこと。
- (4) 由来は「剛毅木訥」は蓋し、古の成言けだといっている。そのころの熟語だったかも。
 *「蓋し」とは、次に述べる判断は、十中八九まちがいがいがないだろうという主体の見込みを表す。思うに、確かに。
- (5)「巧言令色、鮮きかな仁」(3章)や「仁者は其の言ふや訥(じん)す」(282章)と照応して読むと、了解するところの深いものがある。

憲問第十四

子曰、有徳者必有言。

有言者不必有徳。

仁者必有勇。

勇者不必有仁。

し い とくあ もの かなら げんあ
子曰わく、徳有る者は必ず言有り。

げんあ もの かなら とくあ
言有る者は必ずしも徳有らず。

じんしや かなら ゆう
仁者は必ず勇あり。

ゆうしや かなら じんあ
勇者は必ずしも仁有らず。

(14-347)

<子曰わく、徳有る者は必ず言有り>

Q：「子曰わく、徳有る者は必ず言有り」とは何ですか。

A：(1)「孔子が言った。徳性をそなえた人物は、必ず、素晴らしい言葉を言うものだ」の意。

(2)「道徳の備わった人には必ず善言がある。心の中に蓄積された徳が、おのずから外へあふれ出て言葉となるからである」の意。

(3)「必有言」は、きっと善言となって外へあらわれる。

<言有る者は必ずしも徳有らず>

Q：「言有る者は必ずしも徳有らず」とは何ですか。

A：(1)「しかし、素晴らしい言葉を言ったものが、必ずしも、徳性のある人物とは限らない」の意。

(2)「しかし、善言を出す人が、必ずしも徳のある人とは言えない。巧言令色で、外を飾る人もあるからである」の意。

<仁者は必ず勇あり>

Q：「仁者は必ず勇あり」とは何ですか。

A：(1)「また、仁(人間愛)をそなえた人物は、必ず勇氣(思いきりのよい気力)があるものだ」の意。

(2)「仁者はきっと勇氣がある。なぜなら、心に私欲がなく、義であれば行わんとするからである」の意。

<勇者は必ずしも仁有らず>

Q：「勇者は必ずしも仁有らず」とは何ですか。

- A : (1) 「しかし、勇気のある者が、必ずしも、仁者であるとは限らないのだ」の意。
- (2) 「しかし、勇者は必ずしも仁者ではない。中には血気の勇とも言うべき道にはずれた勇もあるからである」の意。
- (3) 言葉は人の表現。真に善い言葉は、真に善い人の独占物。往々にして巧言令色で行いのこれに添わないものもある。しかし、これは、絶対的存在ではない。まことの姿ではない。孔子はこれを戒めたのだ。世に慈母の勇を見る。仁者の勇はこれである。血気の勇とは大いに異なる。

2011年6月23日林明夫記

憲問第十四

子曰、君子而不仁者有矣夫。
 未有小人而仁者也。

しい子曰わく、くんし君子にしてふじん不仁なるものあ者有らん。
いま未だしょうじん小人にしてじん仁なるものあ者有らざるなり。

(14-349)

<子曰わく、君子にして不仁なる者有らん>

Q：「子曰わく、君子にして不仁なる者有らん」とは何ですか。

A：(1)「孔子が言った。学徳ともにすぐれた君子といわれる人物でも、仁の道にかなわない場合もある」の意。

(2)「君子は、立派な人柄ではあるが、聖人のように円満具足の域に達していないから、一時の過ちで仁道からそれることがあるかも知れない」の意。

<未だ小人にして仁なる者有らざるなり>

Q：「未だ小人にして仁なる者有らざるなり」とは何ですか。

A：(1)「しかし、学徳ともにそなわらず、器小なる小人が、仁の道にかなう場合はない」の意。

(2)「しかし、小人は、元来仁に志すことがないから、一時でも仁道にかなったことをすることがあったということは、まだ、かつてないことだ」の意。

(3)論語では、常に君子と小人とを対説する。君子は志ある人であり、学ぶ人であり、知者であり、修徳の人であるが、まだ仁者ではない。君子の最高段階が仁者であって、別なルートの人ではないが、仁者は完成者であり、聖域に達しているが、君子は未完成者でもある。故に、時には不仁に陥る場合もあるであろう。しかし、志のある者、知のある者、反省の力のある者が君子だから、長くその過ちに止まっていなくて、君子の君子たるゆえんがある。孔子は君子を以て自らもゆるし、人もゆるしたが、仁者を以てゆるさなかったのは、このためである。

2011年6月24日林明夫記

憲問第十四

子曰、貧而無怨難。

富而無驕易。

子曰わく、貧しくして怨むこと無きは難く、
富て驕ること無きは易し。

(14-353)

<子曰わく、貧しくして怨むこと無きは難く>

Q:「子曰わく、貧しくして怨むこと無きは難く」とは何ですか。

A: (1)「孔子が言った。貧乏な生活の中で、何も怨むことのない人物になることは、難しいことだ」の意。

(2)「貧乏で生活に困ると、とかく人を怨みがちであるが、貧困でも天命に安んじて怨みがましいことのないのは極めてむずかしい」の意。

(3)「怨」とは、人をうらみ、天を怨んで自分というものに安んじない。

<富みて驕ること無きは易し>

Q:「富みて驕ること無きは易し」とは何ですか。

A: (1)「それに比べれば、裕福でありながら、おごりたかぶるような人物にはならないようにすることは、たやすいことだろう」の意。

(2)「それに比べると、富んでもおごらないということは少しわきまえのある者なら出来ることで、やさしいことだ。しかし、このやさしいことさえ、なかなかできないのが凡人の悲しさだ」の意。

(3)「驕」とは、おごり高ぶってほしいままな行いをする事。

2011年6月24日林明夫記

憲問第十四

子曰、古之学者為己、
今之学者為人。

し い いにしえ がくしや おのれ ため
子曰わく、古の学者は己の為にし、
いま がくしや ひと ため
今の学者は人の為にす。

(14-358)

<子曰わく、古の学者は己の為にし>

Q:「子曰わく、古の学者は己の為にし」とは何ですか。

- A: (1)「孔子が言った。昔の学ぶ者は、自分自身の修養のために学問をしたが」の意。
(2)「古の学者は己の修養のために学問をしたが」の意。
(3)「为己」とは、己の修養のためにする。自分をよくせんがためにする。

<今の学者は人の為にす>

Q:「今の学者は人の為にす」とは何ですか。

- A: (1)「今の学ぶ者は、自分の名を高めるために学問をしている」の意。
(2)「今の学者はただ人に知られんがために学問をしている」の意。
(3)「為人」とは、人に知られんがためにする。

憲問第十四

子曰、君子恥其言之過其行。

子曰わく、君子は、其の言の其の行に過ぎんことを恥ず。

(14-362)

<子曰わく、君子は、其の言の其の行に過ぎんことを恥ず>

Q：「子曰わく、君子は、其の言の其の行に過ぎんことを恥ず」とは何ですか。

A：(1)「孔子が言った。学徳ともにすぐれた君子と言われる人物は、自分の口にする言葉が、自分の実際の行動以上の表現になることを恥とするものだ(言葉以上に実践することに努めることである)」の意。

(2)「君子というものは、その言うことが、その実行することよりも大げさになるのを恥じるものだ」の意。

衛靈公第十五

子曰、不曰如之何、如之何者、
吾未如之何也已矣。

子曰わく、之れを如何にせん、之れを如何にせん、と曰わざる者は、
吾、未だ之れを如何ともすることなきのみ。

(15-394)

<子曰わく、之れを如何にせん、之れを如何にせん、と曰わざる者は、吾、未だ之れを如何ともすることなきのみ>

Q：「子曰わく、之れを如何にせん、之れを如何にせん、と曰わざる者は、吾、未だ之れを如何ともすることなきのみ」とは何ですか。

A：(1)「孔子が言った。どうしたらいいだろう、どうしたらいいだろう、と、自分なりに思案に思案を重ねて苦慮しない者に対しては、私もまた、どうすることもできないのだ」の意。
(2)「どうしたらよかるうか、どうしようかなあと言って、みずからの思慮を尽くして解決を求めようとする者でなかったら、私としても何としてもやりようがないものだ」の意。
(3)「如之何」とは、どうしよう、疑問の辞。重言したのは、文勢を整えるため。常に「之を如何せん」と繰り返して、疑問を抱き、熱心に求めること。
(4)これも孔子の教育法的一面をあらわすもの。156章の「啓発」と合わせてみるべき。その言は簡であるが、学者に対する痛烈極まる警誡(注意喚起のためのことば)である。単位を取って能事、畢れりとする学生には是非聴かせたい。

衛霊公第十五

子曰、君子求諸己。

小人求諸人。

子曰わく、君子は諸れを己に求む。

小人は諸れを人に求む。

(15-399)

< 子曰わく、君子は諸れを己に求む >

Q : 「子曰わく、君子は諸れを己に求む」とは何ですか。

A : (1) 「孔子が言った。学徳ともにすぐれた君子と言われる人物は、すべてを自分に求め、自分を責めるが」の意。

(2) 「君子は何事も自分の責任として我が身に責任を求めて反省をするが」の意。

(3) 「求己」とは、悪いことが起きても自分の責任とし、善いことは自分にそれだけの実力があるかどうかと反省してみる。

< 小人は諸れを人に求む >

Q : 「小人は諸れを人に求む」とは何ですか。

A : (1) 「学徳なく、器小なる小人は、すべてを他人に求め、責任を他人に求めるものだ」の意。

(2) 「小人はすべて他人の責任として、人を責め人に求めるものだ」の意。

(3) 「求人」とは、人の過ちを強く責め、また、己を知ってくれることを要求する。

(4) 古の君子の修養は常に己に求め、己を責めた。儒家の倫理は反省の倫理と言える。

衛霊公第十五

子曰、人無遠慮、必有近憂。

し い わく、ひと とお おもんばかり な かなら ちか うれい あ
子曰わく、人、遠き慮無ければ必ず近き憂有り。

(15-400)

<子曰わく、人、遠き慮無ければ必ず近き憂有り>

Q：「子曰わく、人、遠き慮無ければ必ず近き憂有り」とは何ですか。

- A：(1)「孔子が言った。我々人間において、時間的にも、空間的にも、遠く、広く、しかも深い気配りをしなかったなら、必ずや、身近かに憂いごとが起るものである」の意。
- (2)「人がもし眼前の安きに馴れて、遠い将来のことを手広く熟慮して予防しないと、必ず足元からの禍いが起こるものだ」の意。
- (3)「遠慮」とは、行く先を遠くまで見通す思慮。その中に、前後の周囲を見廻すことも含めて解すべきである。
- (4)人にして履むところは、足を容れる以外の地は、皆、無用の地であるが、しかし、廃することはできない。故に思慮も千里の外にまで行き届かないと患禍が几席の下に在るものだ。

衛霊公第十五

子曰、君子不以言举人。
不以人废言。

しい くんし げん もつ ひと あ
子曰わく、君子は言を以て人を挙げず。
ひと もつ げん す
人を以て言を廢てず。

(15-401)

<子曰わく、君子は言を以て人を挙げず>

Q：「子曰わく、君子は言を以て人を挙げず」とは何ですか。

A：(1)「孔子が言った。学徳ともにすぐれた君子は、すばらしいことを言ったからといって、すぐにその人の価値を認めるようなことはしない」の意。
(2)「君子は、公平で明鏡のような人柄だから、その言うことが善いからといって、言葉だけで直ちに人を信用したり、挙げ用いることをしない」の意。

<人を以て言を廢てず>

Q：「人を以て言を廢てず」とは何ですか。

A：(1)「また、価値のない人だからと言って、その人の言うことを、すべて無視するようなこともしない」の意。
(2)「また、平素悪い人だからとて、その善い言葉まで否定して信じないようなことはしない」の意。
(3)明鏡止水の如き君子の働きの1つを述べたもので、君子は判断も明確、取捨は適正なものでなければならぬ。

衛霊公第十五

子曰、過而不改、是謂過矣。

し い わく、あやまち あらた こ あやまち い
子曰わく、過て改めざる、是れを過と謂う。

(15-408)

<子曰わく、過て改めざる、是れを過と謂う>

Q：「子曰わく、過て改めざる、是れを過と謂う」とは何ですか。

- A：(1)「孔子が言った。(過失は誰にでもある。しかし)過失を犯した時、それを自分で反省し、改めなかったら、それこそ、ほんとうの過失というものだ」の意。
- (2)「人は何人といえども過ちのあるものであるが、過ちを犯してその過ちを改めないのが、ほんとうの過ちというものだ」の意。
- (3)「過」とは、思いが足らなくて、知らず知らずのうちに悪いことをするのを過ちという。これに反して、故意に理に悖(もと)るのを悪という。
- (4)孔子は、過ちがあってはならぬとはいわない。過ったら改めよという(8章)(230章)。同じ過ちを再び犯さないのが偉いといって顔回はほめられた。
- (5)子夏は、「小人の過あやまちや必ずかざ文る」(過失は誰でもあるが、小人が過失をすると、いろいろと飾って言いわけをいい、弁解するものだ)(479章)という。
- (6)子貢は、「君子の過じつげつや日月の食しよくの如ごとし。過あつや人皆ひとみな之これを見る。更あらたむるや人皆あ之あを仰あぐ(君子にも過失がないわけではない。しかし、その過ちは、小人と違って、隠し立てをしないから、衆人が皆これを見て、あの君子にもこのような過ちがあるかと驚くことは、ちょうど日蝕や月蝕を見て、驚き怪しむようなものである。しかし、君子は過ちに気がつくと、直ぐ改めるものだから、その改めるのを見て、人々がさすがに君子だと仰ぎみて感服することは、ちょうど蝕が終わった後の日月が、再びまどか円にして、その光輝が前にも倍するのを見る如くである)(492章)」という。

衛霊公第十五

子貢問曰、有一言而可以終身行之者乎。

子曰、其恕乎。己所不欲、勿施於人。

子貢問いて曰わく、一言にして以て終身之れを行うべき者有りや、と。

子曰わく、其れ恕か。己の欲せざる所、人に施すこと勿かれ、と。

(15-412)

<子貢問いて曰わく、一言にして以て終身之れを行うべき者有りや、と>

Q:「子貢問いて曰わく、一言にして以て終身之れを行うべき者有りや、と」とは何ですか。

A: (1)「門人の子貢が尋ねて言った。たったひとりで、一生涯をとおして、行動する際に心すべきこと、といったら何だろう、と。」の意。

(2)「子貢が『ただ一言で、一生実行してさしつかえのない佳言があるでしょうか』とたずねた」の意。

(3)「一言」とは、ただ一こと。片言。

<子曰わく、其れ恕か。己の欲せざる所、人に施すこと勿かれ、と>

Q:「子曰わく、其れ恕か。己の欲せざる所、人に施すこと勿かれ、と」とは何ですか。

A: (1)「孔子が答えて言った。それは『思いやり』と言うことだ。自分が欲しくないものを、他人に与えてはいけない、と言うことだ。(自分の心をとおして、他人の心を思いやることだ)」の意。

(2)「『まず恕かな。その恕とは、自分が人からされたくないと思うことを他人に対してしないことだよ』と答えた」の意。

(3)「恕」とは、「心」と「如」からなる形成会意の字で、己の心の如く、人の心を考えてやること。思いやり。

(4)これは広大な仁徳の働きの一面であるが、「己の欲せざるところは人に施すことなかれ」(28章)と同じ。しかし、「恕」はただ消極的な面だけではなく、「其れ仁者は、己、立たんと欲して人を立て、己、達せんと欲して人を達す」(148章)という積極的意志の表現があったことも見逃してはならない。その意は、「仁者は、自分が立ちたいと思う時に、まず他人を立たしむる。自分が到達したいと思う時に、まず他人を立たしめる。(すなわち仁者とは、自他のへだてなく、手近に自分の身にたとえを取って、自分の善意を人に及ぼし、己の欲せるところを人に施していくのが仁に到る方法である)」。

衛霊公第十五

子曰、辞達而已矣。

子曰わく、辞は達するのみ。

(15-419)

<子曰わく、辞は達するのみ>

Q : 「子曰わく、辞は達するのみ」とは何ですか。

A : (1) 「孔子が言った。言葉と言うものは、自分の真意を、相手に正しく伝えるもので、それだけのものだ。(真意をゆがめるような、余計な修飾は必要ない)」の意。

(2) 「文言文章は、ただ自分の意志が十分達しさえすればそれでよい。誇張粉飾は避けねばならぬ」の意。

(3) 「辞」とは、広く文章・言語をさす。

(4) 「達」とは、意志を十分通達すること。

季子第十六

孔子曰、益者三友、損者三友。

友直、友諒、友多聞、益矣。

友便辟、友善柔、友便佞、損矣。

こうし い えきしやさんゆう そんしやさんゆう
孔子曰わく、益者三友、損者三友。
な お と も ま こ と と も た ぶ ん と も え き
直きを友とし、諒を友とし、多聞を友とするは、益なり。
べん べ き と も ぜん じ ゆ う と も べん ね い と も そん
便辟を友とし、善柔を友とし、便佞を友とするは損なり。

(16-424)

<孔子曰わく、益者三友、損者三友>

Q:「孔子曰わく、益者三友、損者三友」とは何ですか。

A: (1)「孔子が言った。良い友達と、悪い友達とがある」の意。

(2)「我に益を与える友に三種ある。我に損をかける友に三種ある」の意。

<直きを友とし、諒を友とし、多聞を友とするは、益なり>

Q:「直きを友とし、諒を友とし、多聞を友とするは、益なり」とは何ですか。

A: (1)「良い友達としては、直き(正直)人、諒(誠実)の人、多聞(見聞ひろく、見識豊か)な人」の意。

(2)「直言して隠すことをしない者を友とすれば、己の誤ちを聞くことができる。

誠実にして裏表のない者を友とすれば、己もその影響で誠に進む。

博学・多識な者を友とすれば、己の知識が広まる。この三者は有益な友である」の意。

(3)「直」とは、正直。直言して憚らない。

(4)「諒」とは、信実で欺かない表裏のないこと。

(5)「多聞」とは、博く古今に通じた博学。

<便辟を友とし、善柔を友とし、便佞を友とするは損なり>

Q:「便辟を友とし、善柔を友とし、便佞を友とするは損なり」とは何ですか。

A: (1)「一方、悪い友達は、便辟(ものなれた態度で、巧みにこびへつらう)の人、善柔(人ざわりがやわらかだが、誠実さのない)の人、便佞(口ばかり達者で、誠実さが無い)の人」の意。

(2)「体裁を飾って率直でない者を友とすれば、己の誤ちを聞くことができない。

表面だけを善くして、誠実でない者を友とすれば、己の誠を失うに至る。

口先が上手で、実意のない者を友とすると、己を進歩させるものではない。この三者を友とすれば損になるものだ」の意。

- (3)「便辟」とは、体裁をつくって正直でないこと。
- (4)「善柔」とは、顔色だけにこにこして信実がない。令色のこと。
- (5)「便佞」とは、口先だけでうまいことを言う。巧言と同じ。
- (6)友達は大切である。その善・悪がかくのごとき結果をもたらす。その選択に当たっては、極めて慎重でなければならない。

陽貨第十七

子曰、性相近也、習相遠也。

し い せいあいちが ならいあいとお
子曰わく、性相近し、習相遠し。

(17-436)

<子曰わく、性相近し、習相遠し>

Q : 「子曰わく、性相近し、習相遠し」とは何ですか。

A : (1) 「孔子が言った。人の、生れながらにしての天性は、さして差のあるものではないが、その後の習慣によって、大きな差が出来るのだ」の意。

(2) 「人の生まれついた天性は、大体似たり寄ったりで、そんなに差はないが、その後の習慣教養で、善悪賢愚の隔たりがだんだん遠くなるものだ。(習慣は第二の天性となるから、環境と教育に十分注意しなければならない)」の意。

(3) 「性」とは、生まれつき。人の天性。

(4) 「近・遠」の「近」は同、「遠」は異の意味。

(5) 「習」とは、習慣。習熟。くりかえしやること。

(6) 天性幾分の差はあるが、これを一になしうるものは、習いであり、教えである。学問教育の力の絶対性を高く評価したところに、孔子の学説の特徴がある。

子張第十九

子夏曰、小人之過也、必文。

し か い しょうじん あやまち かなら かざ
子夏曰わく、小人の過や、必ず文る。

(19-479)

<子夏曰わく、小人の過や、必ず文る>

Q：「子夏曰わく、小人の過や、必ず文る」とは何ですか。

A：(1)「門人の子夏が言った。学徳のない、器小なる小人は、過失をすると、必ず、巧みに言いわけをして、ごまかすものだ」の意。

(2)「過失は誰でもあるが、小人が過失をすると、いろいろ飾って言いわけをいい、弁解するものだ」の意。

(3)この章は 408 章の「^{あやま}過ちて改めざる、^こ是れを過ちと謂う」に照応するもの。過失を改めないところに小人といわれる^{ゆえん}所以がある。

*「ゆえん」とは、「ゆえに」の変化。そうするについての方法や、そうである理由。わけ。
(古来の用字が「所以」)

論語抄には掲載されていませんが、是非御熟読下さい。

堯日第二十

子張孔子に問ひて曰く、何如なれば斯れ以て 政 に従ふ可きかと。

子曰く、五美を尊び、四悪を屏くれば、斯に以て 政 に従ふ可しと。

子張曰く、何をか五美と謂ふと。

子曰く、君子は恵にして 費さず、勞して 怨まず、欲して 貪らず、泰にして 驕らず、威ありて 猛からずと。

子張曰く、何をか恵にして 費さずと謂ふと。

子曰く、民の利する所に因りて之を利す。斯れ亦恵にして 費さざるにあらずや。

勞す可きを 扱ひて之を勞す。又誰をか 怨まん。

仁を欲して 仁を得たり。又焉んぞ 貪らん。

君子は衆寡と無く、小大と無く、敢て 慢ること無し。斯れ亦泰にして 驕らざるにあらずや。

君子は其の衣冠を正しくし、其の瞻視を尊くし、儼然たり。人望みて之を畏る。斯れ亦威ありて 猛からざるにあらずやと。

子張曰く、何をか四悪と謂ふと。

子曰く、教へずして 殺す、之を虐と謂ふ。

戒めずして 成るを視る、之を暴と謂ふ。

令を慢にして 期を致す、之を賊と謂ふ。

猶しく之れ人に与ふるなり。出納の 吝なる、之を有司と謂ふと。

(20-498)

< 子張孔子に問ひて曰く、何如なれば斯れ以て政に従ふ可きかと >

Q1: 「子張孔子に問ひて曰く、如何なれば斯れ以て政に従ふ可きかと」とは何ですか。

A: (1) 「子張が孔子に向かって、『いかなることができるようになれば、政治を担当することができますか』とたずねた」の意。

< 子曰く、五美を尊び、四悪を屏くれば、斯に以て政に従ふ可しと >

Q2: 「子曰く、五美を尊び、四悪を屏くれば、斯に以て政に従ふ可しと」とは何ですか。

A: (2) 「孔子は、『五つの美德を貴び行い、四つの悪い行いを除けば、政事に従事させることができる』と答えた」の意。

< 子張曰く、何をか五美と謂ふと >

Q3: 「子張曰く、何をか五美と謂ふと」とは何ですか。

A: (2) 「子張、『五美とは何を申しますか。』」の意。

<子曰く、君子は恵にして費さず、勞して怨まず、欲して貪らず、泰にして驕らず、威ありて猛からずと>

Q4:「子曰く、君子は恵にして費さず、勞して怨まず。欲して貪らず、泰にして驕らず、威ありて猛からずと」とは何ですか。

A:(2)「『君子は恵にして費さず』とは、『君子は人民に恵み深くするが、さりとしてその富を浪費してはならぬ』

『勞して怨まず』とは、『君子は、民に骨折りの仕事をさせるが、さりとして民が怨むようではいけない』

『欲して貪らず』とは、『君子は欲望があるが、さりとして他人のものを貪り求めることがない』

『泰にして驕らず』とは、『君子は泰然とゆったりしているが、さりとして人におごりたかぶることがない』

『威ありて猛からず』とは、『君子は自然に備わった威厳はあるが、さりとして他人を害そこなうような猛々ただけしさはない』

『これが五美というものだ』の意。

<子張曰く、何をか恵にして費さずと謂ふと>

Q5:「子張曰く、何をか恵にして費さずと謂ふと」とは何ですか。

A:(2)「子張、それでは恵にして費やさずとはどういう意味でございますか」の意。

<子曰く、民の利する所に因りて之を利す。斯れ亦恵にして費さざるにあらずや>

Q6:「子曰く、民の利する所に因りて之を利す。斯れ亦恵にして費さざるにあらずや」とは何ですか。

A:(2)「孔子はこの質問に答えて、五美の内容を詳述した。『民が自分たちの利となると思うことによって民に利を与えていく。つまり民が農業開発とか、山林開発を利とするなら、それに都合のよいような政治をすれば、これが恵にして費やさずということになるではないか』の意。

<勞す可きを扞びて之を勞す。又誰をか怨まん>

Q7:「勞す可きを扞びて之を勞す。又誰をか怨まん」とは何ですか。

A:(2)「人民を使役するだけの理由が十分ある事柄で民に骨折らせれば、人民は喜んで働いて誰も怨むことがない。たとえば、水害に苦しむ民に、水防作業をさせたら、誰を怨むことがあるうや」の意。

<仁を欲して仁を得たり。又焉くんぞ貪らん>

Q8:「仁を欲して仁を得たり。又焉くんぞ貪らん」とは何ですか。

A:(2)「又君子の欲するところが正しい道であって、仁なら仁道を得たいと欲したら、伯夷と叔斉が仁を求めて仁を得たように、民心が仁道に向かって作興されれば、これ以上何をむさぼる必要があるか」の意。

<君子は衆寡と無く、小大となく、敢て慢ること無し。斯れ亦泰にして驕らざるにあらずや>

Q9 : 「君子は衆寡と無く、小大となく、敢て慢ること無し。斯れ亦泰にして驕らざるにあらずや」とは何ですか。

A : (2) 「又君子は相手が大勢でも少数でも、事が大きくても小さくても、かかわりなく、又相手をあなどり馬鹿にすることなく、常にゆったりとして、しかも謙虚だから、これはまた泰にして驕らずということではないか」の意。

<君子は其の衣冠を正しくし、其の瞻視を尊くし、儼然たり。人望みて之を畏る。斯れ亦威ありて猛からざるにあらずやと>

Q10 : 「君子は其の衣冠を正しくし、其の瞻視を尊くし、儼然たり。人望みて之を畏る。斯れ亦威ありて猛からざるにあらずやと」とは何ですか。

A : (2) 「又君子は衣冠を正しく身につけ、目のつけどころに心を用いてキョロキョロしないから、その容子が儼然となって、人が望み見て、おのずから畏敬の念を生ずる。これが威あって猛からずということではなからうか。以上のことが五美というものである」との意。

<子張曰く、何をか四悪と謂ふと>

Q11 : 「子張曰く、何をか四悪と謂ふと」とは何ですか。

A : (2) 「子張、『ではどういうことを四悪といえますか』」の意。

<子曰く、教へずして殺す、之を虐と謂ふ>

Q12 : 「子曰く、教へずして殺す、之を虐と謂ふ」とは何ですか。

A : (2) 「孔子は四悪について次のような説明をした。『四悪とは虐・暴・賊・吝^{りん}の四つだ』」の意。

(3) 「君子が教育を怠って、人民に為すべきことと、為すべからざることを教へもしないで、罪を犯したからとてこれを殺すのを虐という」の意。

<戒めずして成るを視る、之を暴と謂ふ>

Q13 : 「戒めずして成るを視る、之を暴と謂ふ」とは何ですか。

A : (2) 「平素人民に注意や警告を与えて命令に服するように導くこともせず、俄かに人民に向かって事の実績を示せと迫るのを暴というのだ」の意。

<令を慢にして期を致す、之を賊と謂ふ>

Q14 : 「令を慢にして期を致す、之を賊と謂ふ」とは何ですか。

A : (2) 「次に命令をゆるがせにおきながら、最後の期限を厳重にせき立てるのを賊、民の生活をそこなうというのだ」の意。

<猶しく之れ人に与ふるなり。出納の吝なる、之を有司と謂ふと>

Q15 : 「猶しく之れ人に与ふるなり。出納の吝なる、之を有司と謂ふと」とは何ですか。

A : (2) 「どうせ与えねばならぬものであるにかかわらず、その物を与える場合に、出し惜しみをするのが吝であって、それが有司・官僚というもので、君子のなすべきことでない。以上の四つを四悪といって、政治家のよくよく戒めねばならぬもののみである」の意。

堯日第二十

子曰、不知命、無以為君子也。

不知礼、無以立也。

不知言、無以知人也。

子曰わく、命を知らざれば、以て君子為ること無きなり。

礼を知らざれば、以て立つこと無きなり。

言を知らざれば、以て人を知ること無きなり。

(20-499)

<子曰わく、命を知らざれば、以て君子為ること無きなり>

Q：「子曰わく、命を知らざれば、以て君子為ること無きなり」とは何ですか。

A：(1)「孔子言う、君子の君子たるゆえんは、知命・知礼・知言の三つに存する。天の偉大な力が、万物を創造し、それにそうあるべき道理を与えたのが天命である。人は天命を知ることによって、自分が天から稟けたものを行い尽くし、自分ではいかんとも出来ない窮達の命に対しては、信じ安んずる心がまえができる。このようにまず人事を尽くしても逆境に在った場合は、天をとがめず、人を怨まず、道を行うことを楽しんで安んずることができなくて、どうして君子といえようや」の意。

(2)「知命」とは、天命を知って、これに安んずること。天の命ずるものは、少なくとも、人の稟けた本性、この世に生をうけた意義・使命、自分の力では何ともできない運命というような三つの意味がある。天命を使命、または運命と訳しては狭くて俗っぽい。使命も運命も含んで、孔子がしばしば言及した「天」に通じるところの天命というべきである。孔子は五十歳で天命を知ったといい、孟子は、その心を尽くす者はその性を知り、その性を知れば天を知る(尽心上)と言った。孔子と孟子の学説としては、極めて重大な問題である。

(3)「君子」とは、智と徳の完成した人物。孔子の理想とした人間像の名である。

<礼を知らざれば、以て立つこと無きなり>

Q：「礼を知らざれば、以て立つこと無きなり」とは何ですか。

A：(1)「礼は実に人類文化の象徴である。礼を知らないと、進退の宜しきは得られず、品位は保てず、立派な文化人としての行動が確立しない。どうして君子ということができようや」の意。

(2)「知礼」とは、礼を知ってこれを守り、その坐作・進退を礼にかなうようにするのみでなく、大きく社会・国家の礼法を遵守すること。

(4)「立」とは、確立。自主的に立つこと。他の力を借りないで、自主独往できるの「不知礼、無以立也」を参照。

< 言を知らざれば、以て人を知ること無きなり >

Q : 「言を知らざれば、以て人を知ること無きなり」とは何ですか。

A : (1) 「言は人の心の声である。知識が磨かれ、正しい判断力があって、人の言の正邪善悪を弁じて迷わないようではなくては、どうして、よく人を知って正しく対処することのできる君子といえようや」の意。

(2) 「知言」とは、人の言を聞いて、その言が、どういう心から出たか、どういう意味かを知る。人の言の善悪・正邪と、その言った人の真意まで知ること。

(3) 知命・知礼・知言を以て論語の全章を結んだのは意味がある。知は孔子の好学を意味し、知命は首章の「人知らずして慍らず、亦た君子ならずや」にも応ずる。礼は孔子の学問の対象であり、社会の秩序であり、国家の法制であり、人倫の規範であって、仁徳の外部に表現されたものである。実に人類文化の象徴である。いかに物質文明が進歩しても、礼のない社会は文化社会とはいえない。中国の思想文化は、礼の消長の歴史ともいえる。